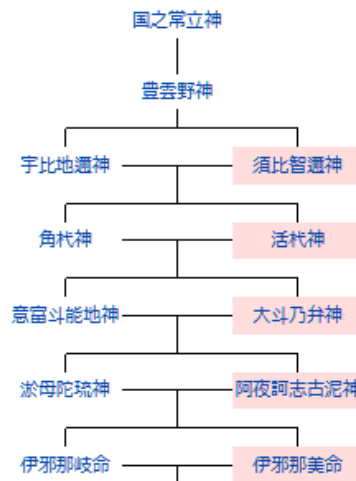


正史を彷徨う

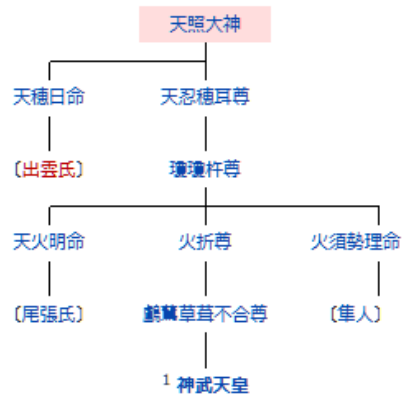
20章 継体天皇までの后妃とその皇子皇女

森隆一

神世七代 (天地開闢・国産) [編集]



地神五代 (天孫降臨から初代) [編集]



Wikipedia 皇室の系図一覧より

20. 崇神天皇から継体天皇までの后妃とその皇子皇女

序

天皇の系図では、Wikipedia「皇室の系図一覧」のように、子女の配偶者は書かれていないものが多く、后妃の父母が入ったものはあまり見た記憶がない。一方、源頼朝と北条時政、織田信長と斎藤道三のように、岳父は重要な役割を果たしている。前者は入り婿的、後者は後援的と言えるのではないか。この他に、攻略的なものも考えられる。倭王朝の東遷ではこれが行われたのではと想っている。岳父は家臣となり、人質的な意味もあったと考える。

兄妹の間の婚姻も見られるが、異母兄妹である。近親度としては、叔父・姪間の婚姻と同程度ということである。

菟道稚郎子と日本武尊について、特にその子孫について、ウェブ・サーフィンしている中で、「[日本神話・神社まとめ](#)」というサイトを見つけた。このサイトでは、現代語訳とともに、各天皇紀ごとに書かれている后妃と子女を系図として示している。これに手を加えたもの、具体的には、后妃の父母と子女の配偶者や子供・子孫を加えたものの作成を目指す。

20.1. 系図について

「日本神話・神社まとめ」に書かれている、古事記による仁賢天皇と継体天皇の系図を示す。

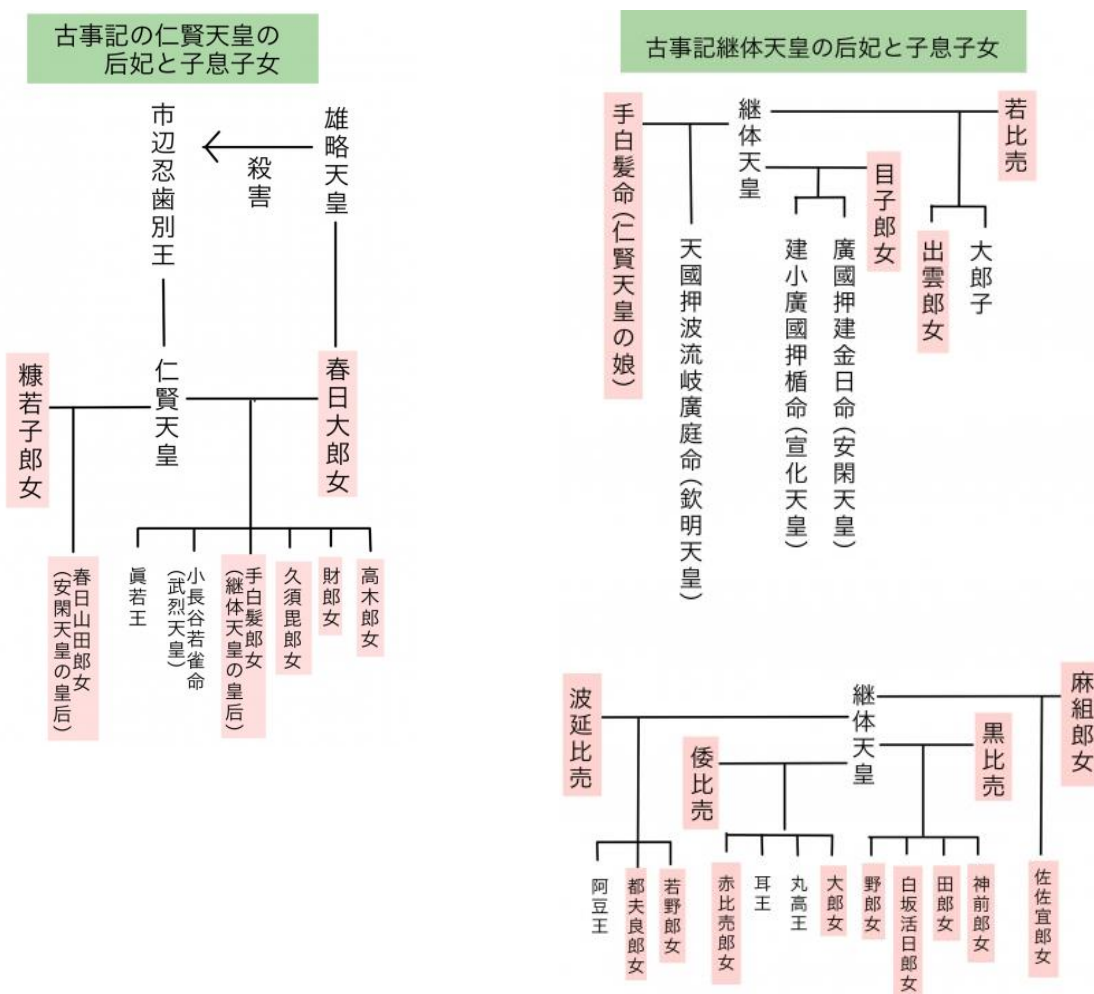


図 20.01 日本神話・神社まとめでの系図例

この図を選んだ経緯ははっきりとは覚えていない。1つの図に収めたかったのも、后妃の数の少ない天皇と中くらいの天皇ということで選んだと記憶している。左図の該当部分を引用する。これは、古事記の仁賢天皇紀

の前文である。

意意祁命 坐石上廣高宮 治天下也 天皇 娶大長谷若建天皇之御子 春日大郎女 生御子 高木郎女 次財郎女 次久須毘郎女 次手白髮郎女 次小長谷若雀命 次眞若王 又娶丸邇日爪臣之女 糠若子郎女 生御子 春日山田郎女 此天皇之御子 并七柱 此之中 小長谷若雀命者 治天下也

上の図を 90 度左回転すれば、すなわち、横書きにすれば、1 枚に収まり、横方向はかなり余裕があるので、補足を書きもむことも可能であろう。また、横文字ならば、Excel で作成できそうだということで、踏み切ることにした。

推古天皇と后妃のいない天皇を除く全ての天皇紀に后妃とその子女に関する記事が書かれている。このうち、神武天皇に関しては、書かれている位置は異なっている。古事記では、東征終了後に纏めて書かれているが、日本書紀では日向で吾平津媛 を妃とすることは東征前に、媛踏□五十鈴媛命を正妃とすることは東征後に書かれている。

その他の天皇紀については、日本書紀では立後の記事にまとめてかかれ、古事記では、和風諡号・宮に続いて、娶△△女○○生御子・・・の形式で書かれている。古事記では立後の記載がない。

皇子皇女の配偶者は殆ど書かれていない。代って、○○の祖という注が

書かれている場合が多い。まれに、彼らの子供が書かれていることもある。この辺りも、検討すれば、何かが得られるのかもしれない。

他については、人名で検索して、ヒットした記事から探すことになるが、見つけられるかどうか疑わしい。見つけられた場合、“〈記事〉”で記入する予定であるが、かなりの時間が必要であり、今後の課題としておく。

本章では、系図の作成と関連事項の検索、および、簡単に見つけられる問題点の指摘を行っていく。

この図を活用できるかどうかはわからないが、活用する為には豪族に関する知識が必要と考える。これは 22 章で行う予定である。また、本章と続いて予定している 2 章を基に、各天皇紀を見直すことも必要と考えている。

図の作成にはエクセルを用いる。エクセルには各種のグラフを描くためのグラフィック機能が装備されている。系図は人名の間に水平線と垂直線を描いたものであるが、罫線ツールで可能であった。

図に関する注意を述べておく。

まず、エクセルの縦書きは字間が長くなるため、縦書きは諦め、横書きとした。これは、Wikipedia の「皇室の系図一覧」でも採用されている。次に、后妃の並びは記紀に書かれている順で上から並べた。天皇の上下に均等に近い形で配置した。1 人の場合は、天皇の下に置いた。

后妃の左には出自データを記した。〇〇の女と〇〇の弟(妹)が殆どであるが、出身地を記しただけのものもある。皇子皇女の右側には、別名など注意的なものを置いた。

一書云に書かれた人は、可能ならば、<〇〇〇>で書き込んだが、書き込みきれなかったものもある。

「[日本神話・神社まとめ](#)」で、「〇〇天皇の皇后と妃とその子供たち」で系図が書かれているものにはリンクをはることにした。また、「解説」というタイトルで筆者の見解が書かれている。これらの中には、面白いものも見られる。「解説のタイトル」から”で幾つかを引用する。

寄り路

エクセルを系図作成に用いるのは、エクセルの使用法としては、副次的なものである。統計処理を行うために開発されたもので、表計算ソフト、あるいはスプレッド・シート、と呼ばれていた。副次的といっても、計算結果をそのままわかる人は少なく、表やグラフを作成することは重要である。エクセル以外に、幾つかのソフトが出回っていたが、現在はエクセルが一般的である。

20.2. 神武天皇の後妃と皇子皇女

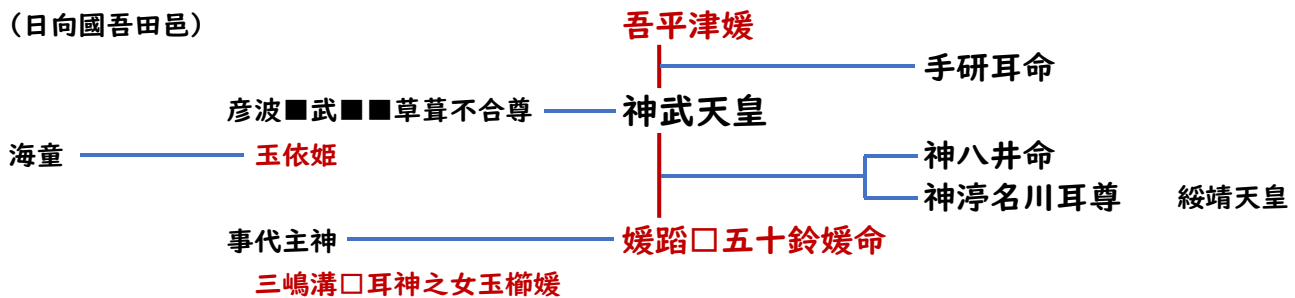


図 20.02A 神武天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

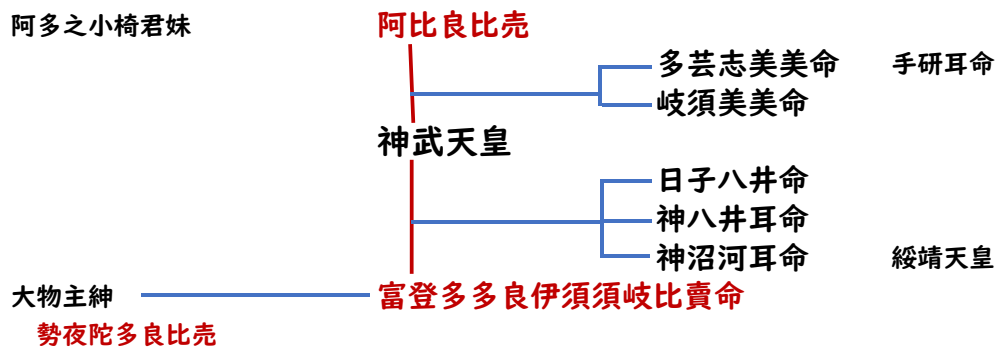


図 20.02B 神武天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「吾平津媛」では

吾平津媛は、古代日本の人物。古事記では阿比良比売と記される。日本書紀によれば、日向国吾田邑の人である。

記紀には両親についての記載はない。古事記によれば、阿多之小椅君の妹。同じく古事記には火照の子孫に隼人阿多君がある。なお、古代豪族系

図集覧によれば、兄に阿多小橋君の祖の天曾利がいる。上述の阿多之小橋君は、日本書紀に火闌降の子孫としてみえる吾田君小橋と同一と思われる。そのため、同じく日本書紀に火闌降の子孫としてみえる隼人との関連が指摘される。

Wikipedia「ヒメタタライスズヒメ」では

媛踏鞮五十鈴媛は、日本書紀に登場する人物・女神で、初代天皇・神武天皇の皇后（初代皇后）。比売多多良伊須氣余理比売に相当する。伝承ごとに細部の差異はあるものの、母親はヤマト地方の有力者の娘で、父親は神であったと描かれている。神武天皇に嫁いで皇后となり、2代天皇の綏靖天皇を産んだとされている。

古事記では、はじめ富登多多良伊須須岐比売という名であったが、のちに比売多多良伊須氣余理比売に改められたことが示されている。詳細は古事記にみる誕生時の逸話参照。単に伊須氣余理比売と書くこともある。また、単に五十鈴媛命ということもある。

古事記では 7 年滞在した阿岐國之多祁理宮と 8 年滞在した吉備之高嶋宮で妃の話は無かったのか。

古事記では、天神御子 邇藝速日命の妃とその子について書かれている。



図 20.02C 邇藝速日命の妃とその子（古事記）

日本神話・神社まとめ

[「イワレビコの女性関係\(古事記\)」](#)

[「神武天皇とイスケヨリヒメが結ばれる\(古事記\)」](#)

「古代豪族系図集覧」は、近藤敏喬 編、東京堂出版 1993

20.3. 綏靖天皇の後妃と皇子皇女

綏靖天皇から開化天皇までの8人の天皇は欠史8代と呼ばれている。天皇紀に事蹟の記事が書かれていないという意味であろう。実際后妃とその子女のみが書かれている。

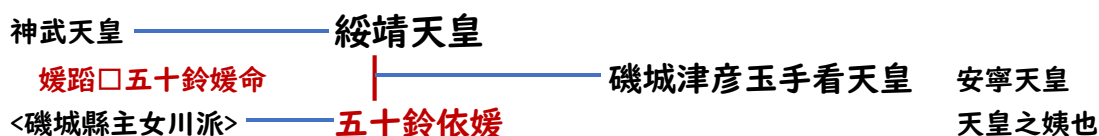


図 20.03A 綏靖天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

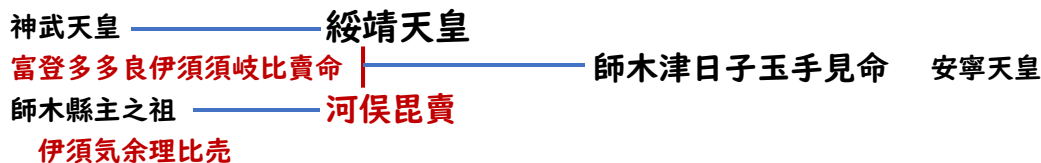


図 20.03B 綏靖天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「五十鈴依媛命」では

姉の姫踏鞮五十鈴媛命は神武天皇の皇后であり、豊玉姫・玉依姫姉妹と同じく、甥・叔母の異世代婚の系譜を伝える。日本書紀の安寧紀によると、五十鈴依媛命は事代主神の少女とあり、これは綏靖紀二年条に“(天皇の父である綏靖天皇は)十鈴依媛を立てて皇后と為したまう。すなわち天皇の姨なり”とあるのと合致する。なお、古事記には五十鈴依媛命は登場せ

ず、河俣毘売が綏靖天皇の皇后である。

Wikipedia「河俣毘売」では

古事記では河俣毘売、日本書紀第1の一書では川派媛といい、師木県主(磯城県主)の祖先である家系の出身。師木県主波延(安寧天皇皇后、阿久斗比売の父)の妹。なお、日本書紀本文と第2の一書ではカワマタヒメは登場せず、本文では五十鈴依媛命、第2の一では春日県主大日諸の娘である系織媛が綏靖天皇の皇后とされる。

Wikipedia「トヨタマヒメ」では

古事記では豊玉毘売・豊玉毘売命、日本書紀では豊玉姫と表記される。海神の娘で、竜宮に住むとされる。真の姿は八尋の大和邇であり、異類婚姻譚の典型として知られる。神武天皇の父の鸕鷀草葺不合尊の母であり、天皇の母の玉依姫の姉にあたる。

海神豊玉彦命(綿津見大神)の娘。豊玉姫・豊玉彦のように、ヒメとヒコの二者(この場合は父娘)がペアで統治を行う体制はヒメヒコ制と呼ばれる。日本書紀、古事記共に、妹に玉依姫がいる。また、古代豪族系図集覧によれば、弟に宇都志日金拆命(穗高見命。阿曇氏の祖)がいる。

日本神話・神社まとめ

[「綏靖天皇 \(四\) 婚姻と系譜\(日本書紀\)」](#)

20.4. 安寧天皇の後妃と皇子皇女

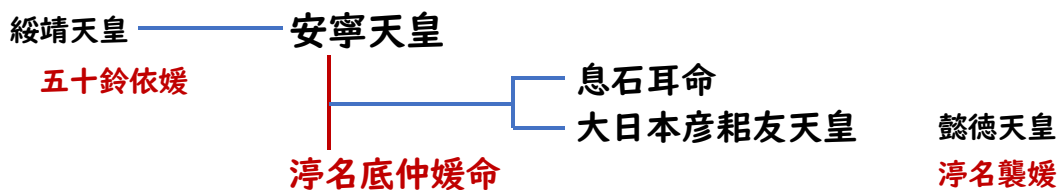


図 20.04A 安寧天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

一書云 で次が書かれている。

一書では磯城縣主葉江女川津媛という。一では大間宿禰女系井媛という。また、第一は長兄の常津彦、第二は曰大日本彦耜友天皇、第三は磯城津彦命の三皇子を生んだともいう。

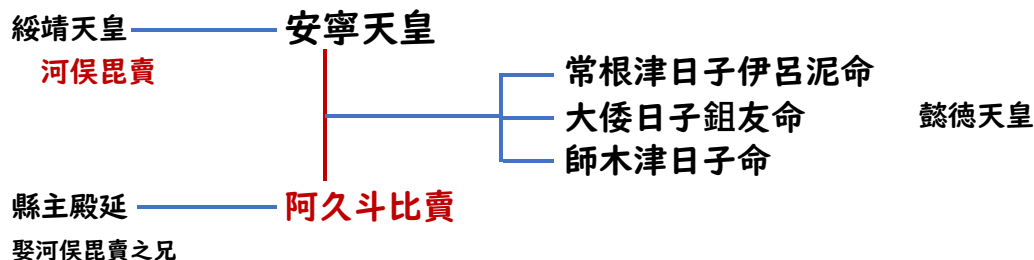


図 20.04B 安寧天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

次の系譜も書かれている。

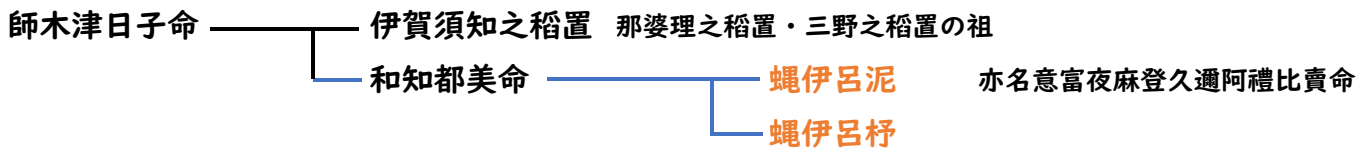


図 20.04C 師木津日子命の皇子皇女(古事記)

Wikipedia「淳名底仲媛」では

淳名底仲媛は、安寧天皇の皇后。息石耳命と懿徳天皇と磯城津彦命らの生母。日本書紀本文での皇后。淳名襲媛とも。事代主の孫鴨王の娘。母は不明。安寧3年に皇后になる。

先代旧事本紀では 三世孫 天日方奇日方命 亦名 阿田都久志尼命 此命 娶日向賀牟度美良姫 生一男一女 兒 健飯勝命 妹 淳中底姫命 此命 片鹽 浮穴宮天皇 安寧 片鹽浮穴宮 或本坐輕地曲峽宮 立為皇后 誕生四兒 即 大日本根子彦耜友天 懿徳 次 常津命 次 磯城津彦命 次 手研彦奇友背命 也 とある。天日方奇日方命の娘。なお、古事記での皇后は、師木県主波延の娘・阿久斗比売、日本書紀第1の一書での皇后は磯城県主葉江の娘である川津媛、第2の一書での皇后は大間宿禰の娘である糸井媛。

Wikipedia「倭国香媛」では

倭国香媛は、古代日本の伝承上の人物。孝霊天皇の妃で、倭迹迹日百襲姫命と吉備津彦命の母親とされる。別名は絪某姉(はえいろね)。妹の絪某

弟(はえいろど)も孝霊天皇の妃とされる。日本書紀には出自の記載がないが、古事記では安寧天皇の曾孫で淡路島出身の蠅伊呂泥またの名、意富夜麻登久邇阿礼比売命と記されている。

古事記が記す系譜によれば、蠅伊呂泥と蠅伊呂杼は師木県主波延の玄孫に当たる。またの名「おほやまとくにあれひめのみこと」は神武天皇の名前神倭伊波礼毘古命に類似するが、その理由は不明である。

20.5. 懿徳天皇の後妃と皇子皇女



図 20.05A 懿徳天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

一書の内容は

一には磯城縣主葉江男の妹の猪手女泉媛、一には磯城縣主太眞稚彦の女の飯日媛ともいう。

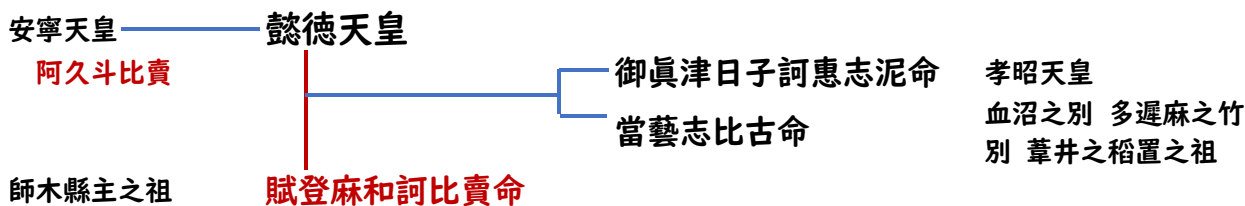


図 20.05B 安寧天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「天豊津媛命」では

天豊津媛命は、欠史八代、懿徳天皇の皇后。孝昭天皇と武石彦奇友背の生母。日本書紀本文では懿徳天皇の皇后で、息石耳命の娘とされている。古事記での懿徳天皇の皇后は、師木県主の祖である賦登麻和訶比売命（飯日比売命）、日本書紀第1の一書では磯城県主葉江の男弟猪手の娘である

泉媛、第2の一書では磯城県主太真稚彦の娘である飯日媛とされる。

宝賀寿男は、孝昭天皇の母である懿徳天皇の皇后は賦登麻和訶比売命で、泉媛は懿徳天皇の妃の一人であったと主張している。

Wikipedia「賦登麻和訶比売命」では

賦登麻和訶比売命は、古代日本の女性。古事記では賦登麻和訶比売命、別名を飯日比売命と伝え、日本書紀では飯日媛としている。

古事記においては師木県主の祖とだけ伝えるが、日本書紀では太真稚彦が父としている。ただし天皇系譜の世代数や古代の命名法などを考え合わせると、系譜上の位置づけは葉江の子で太真稚彦の妹に置かれるものと見られる。また孝昭天皇の母であっても、多芸志比古命は兄弟の一人であったと見る説もある。

20.6. 孝昭天皇の後妃と皇子皇女

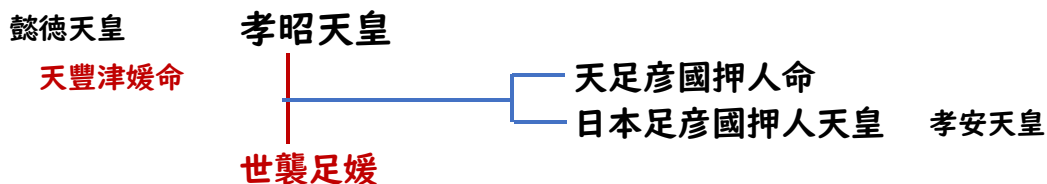


図 20.06A 孝昭天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

一書云 で次が書かれている。

一つには磯城縣主葉江の女の淳名城津媛、もう一つには倭國豊秋狹太雄の女の大井媛という。

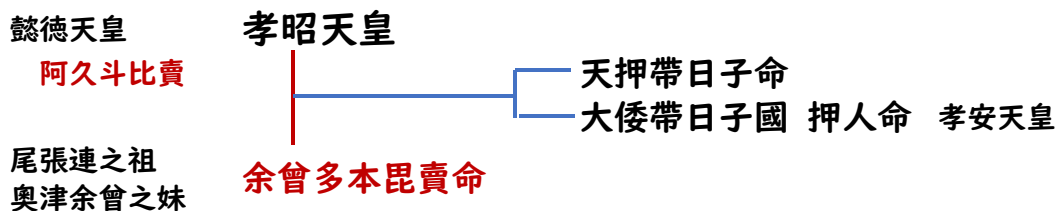


図 20.06B 孝昭天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「世襲足媛」では

世襲足媛は、欠史八代、孝昭天皇の皇后。孝安天皇と天足彦国押人命の生母。古事記では尾張連の祖・奥津余曾の妹である余曾多本毘売命、日本書紀本文では尾張連の祖・瀛津世襲の妹である世襲足媛と表記される。

なお孝昭天皇の皇后として日本書紀第 1 の一書では磯城県主葉江の娘である淳名城津媛、第 2 の一書では倭國豊秋狭太媛の娘である大井媛となっている。

20.7. 孝安天皇の後妃と皇子皇女



図 20.07A 孝安天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

一書云 で次が書かれている。

一つには磯城縣主葉江の女の長媛、もう一つには、十市縣主五十坂彦の女の五十坂媛という。

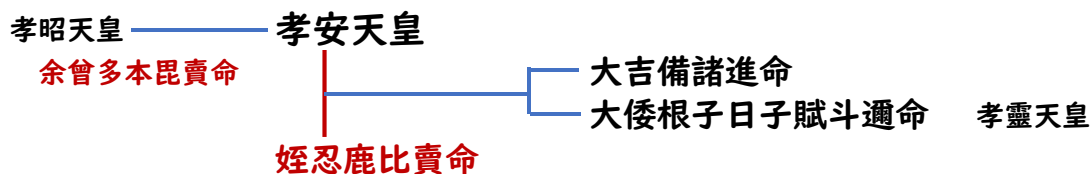


図 20.07B 孝安天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「世襲足媛」では

異表記として忍鹿比売命、押媛命などが存在する。

古事記、日本書紀、先代旧事本紀など各史料に登場する女性で、孝安天皇の皇后として孝霊天皇と大吉備諸進命を生む。天足彦国押人の娘かつ孝安天皇の姪とされる。ただし日本書紀第1の一書での孝安天皇の皇后は、磯城縣主葉江の娘である長媛で、第2の一書では十市縣主五十坂彦の娘で

ある五十坂媛とされている。

駿河浅間大社の大宮司家(富士氏)は和爾部姓で和邇系図(和珥氏を参照)を伝えており、真偽は詳らかでないが、孝昭天皇の皇子天足彦国押人命の子として押媛命(一に忍鹿比売命、母は建田背命の妹 宇那比媛命也。孝安天皇の皇后)弟 和爾日子押人命(一に稚押彦命、母同上。大倭和邇里に居る)と記載されている。

20.8. 孝靈天皇の後妃と皇子皇女

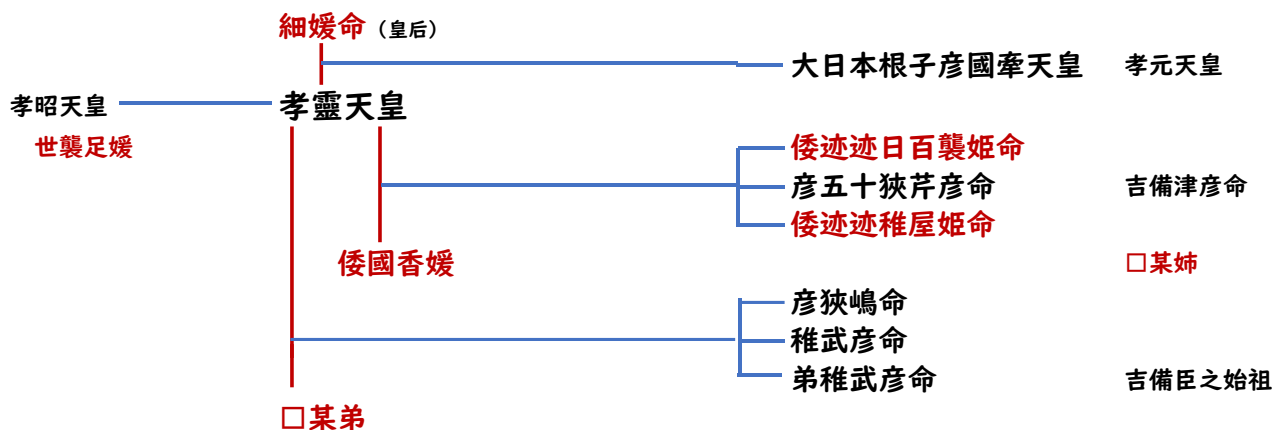


図 20.08A 孝靈天皇の後妃とその皇子皇女 (日本書紀)

細媛命に関して、一書云 で次が書かれている。

春日千乳早山香媛である。また、十市縣主らの祖の女の眞舌媛である。

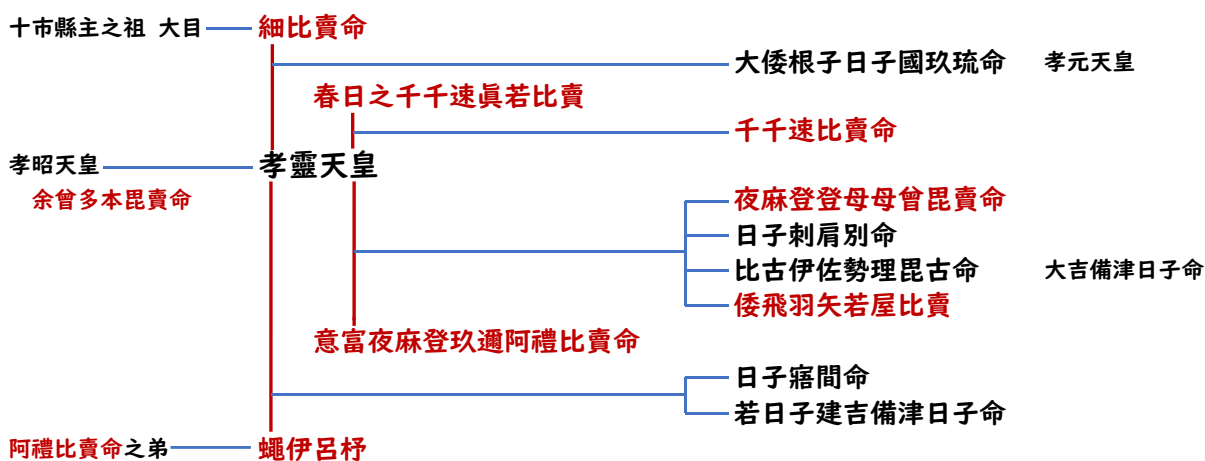


図 20.08B 孝靈天皇の後妃とその皇子皇女 (古事記)

次の文がかかれています。

大吉備津日子命と若建吉備津日子命の2柱は針間氷河之前で貧困の時を過ごした。

針間は吉備への入り口で向和吉備國と言われている。

それゆえ、大吉備津日子命は吉備上道臣の祖である。次の若日子建吉備津日子命は吉備下道臣笠臣の祖である。次の日子寤間命は針間牛鹿臣の祖である。次の日子刺肩別命は高志之利波臣・豊國之國前臣・五百原君・角鹿海直の祖である。

大吉備津日子命は図 20.08A では見られない。若建吉備津日子命は彦狹嶋命と考えられる。

顕宗天皇・仁賢天皇を連想させる。

Wikipedia「細媛命」では

細媛命は、孝霊天皇の皇后。孝元天皇の生母とされる。

出自に関して、日本書紀本文では磯城県主の大目の娘とされ、古事記では十市県主の祖の大目の娘である細比売としている。なお、日本書紀第1の一書で孝霊天皇の皇后は春日千乳早山香媛であり、第2の一書では十市県主等の祖である真舌媛としている。

コトバンク「春日千千速真若比売」では

古事記にみえる孝霊天皇の妃。天皇の寵愛をうけて千千速比売命を生ん

だという。日本書紀に見える春日千乳早山香媛と同一人物か。

20.9. 孝元天皇の後妃と皇子皇女

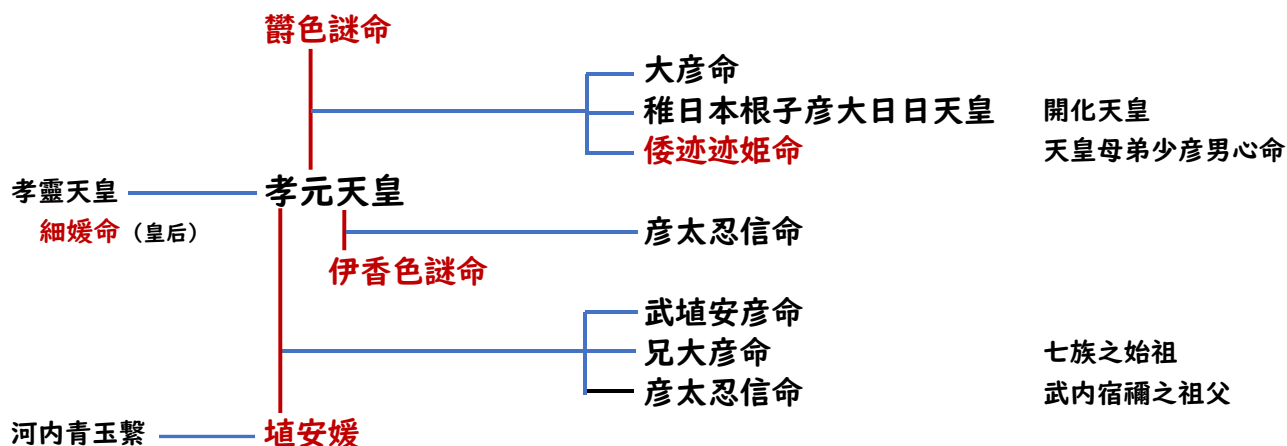


図 20.09A 孝元天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

次の文がかかれています。

兄大彦命は阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹狹城山君・筑紫國造・越國造・伊賀臣 など

七族の始祖である。彦太忍信命は武内宿禰の祖父である。

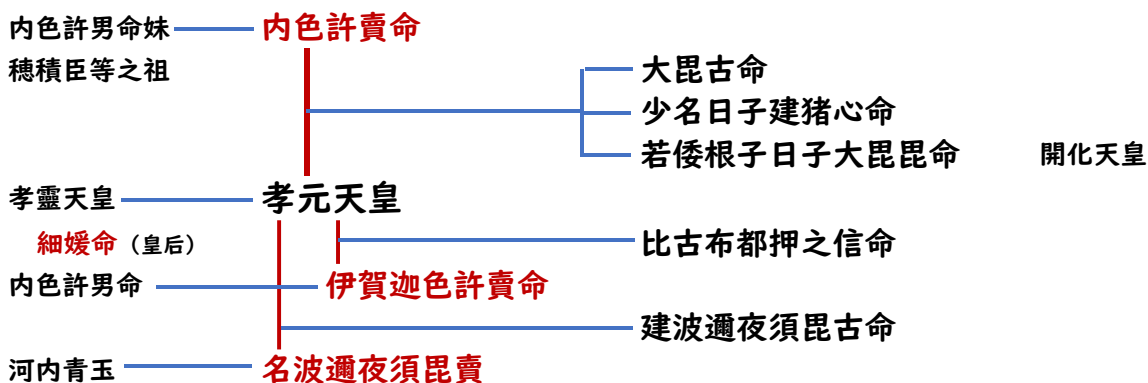


図 20.09B 孝元天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

古事記には次の建内宿禰に関する系譜が書かれている。

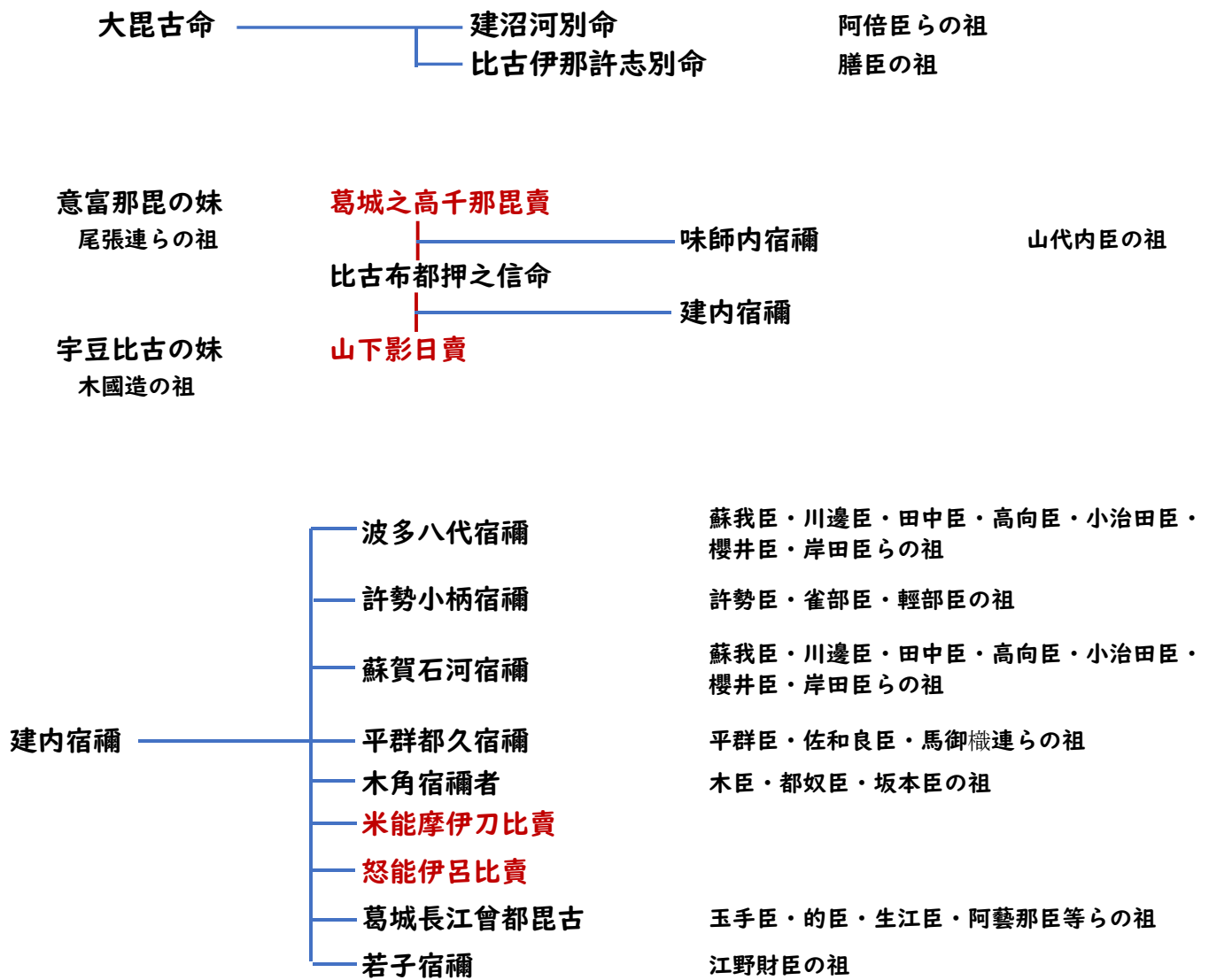


図 20.09C 孝元天皇の皇子皇女（古事記）

大伴・物部(・中臣)を除く主な豪族がかかっている。

Wikipedia「鬱色謎命」では

鬱色謎命は、孝元天皇の皇后。古事記には内色許売命(読み方同じ)とある。先代旧事本紀によると、父は大矢口宿禰命(大水口宿禰命とも)で、母

は坂戸由良都姫命。同母兄に鬱色雄命(穗積氏祖)がいる。大綜麻杵命(伊香色雄命・伊香色謎命の父)の同母姉(妹)。大彦命・開化天皇の母。

孝元天皇7年2月2日、皇后に立てられた。開化天皇元年1月4日、皇太后となった。

Wikipedia「伊香色謎命」では

伊香色謎命は、孝元天皇の妃、開化天皇の皇后。古事記には内色許男命の娘で伊迦賀色許売命(読み方同じ)とある。父は大綜麻杵命で、母は高屋阿波良姫。同母兄に伊香色雄命がいる。彦太忍信命(父は孝元天皇。武内宿禰の祖父(記では父)。磐之媛命の高祖父(記では曾祖父))・崇神天皇(父は開化天皇)の母。

孝元天皇2年(前213年)、孝元天皇の妃となった。開化天皇6年1月14日(前152年2月25日)、亡夫孝元天皇と叔母(伯母)・皇后鬱色謎命の皇子である開化天皇の皇后となった。崇神天皇元年1月13日(前97年2月17日)、崇神天皇の即位と同日に皇太后となった。

Wikipedia「埴安媛」では

埴安媛は、古代日本の女性。古事記では波邇夜須毘売、系図では波迹安媛命と表記されるが、神としての波邇夜須毘売神とは別人。

父は河内青玉繫で、孝元天皇との間に武埴安彦命を生んでいる。武埴安彦命は反乱を起こすが誅殺されている。

日本神話・神社まとめ

[「孝元天皇と妻、その子供たち\(古事記\)」](#)

[「孝元天皇の子孫\(古事記\)」](#)

20.10. 開化天皇の后妃と皇子皇女

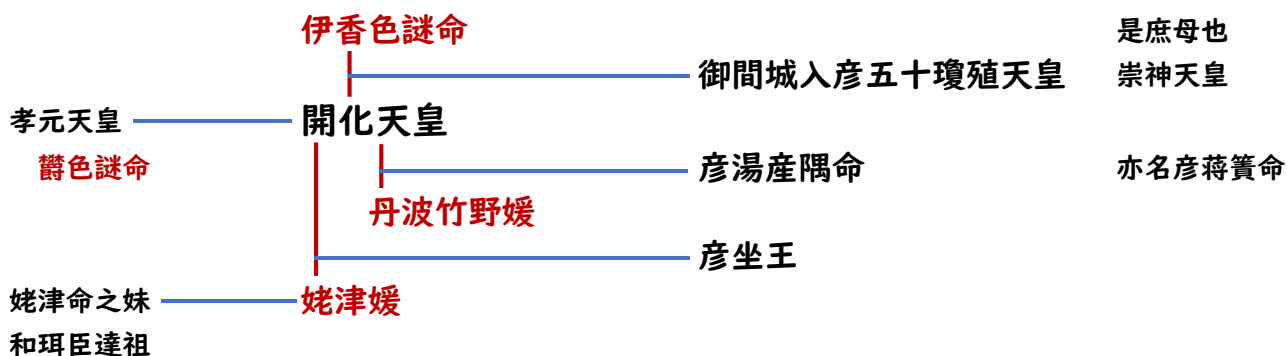


図 20.10A 開化天皇の后妃とその皇子皇女（日本書紀）

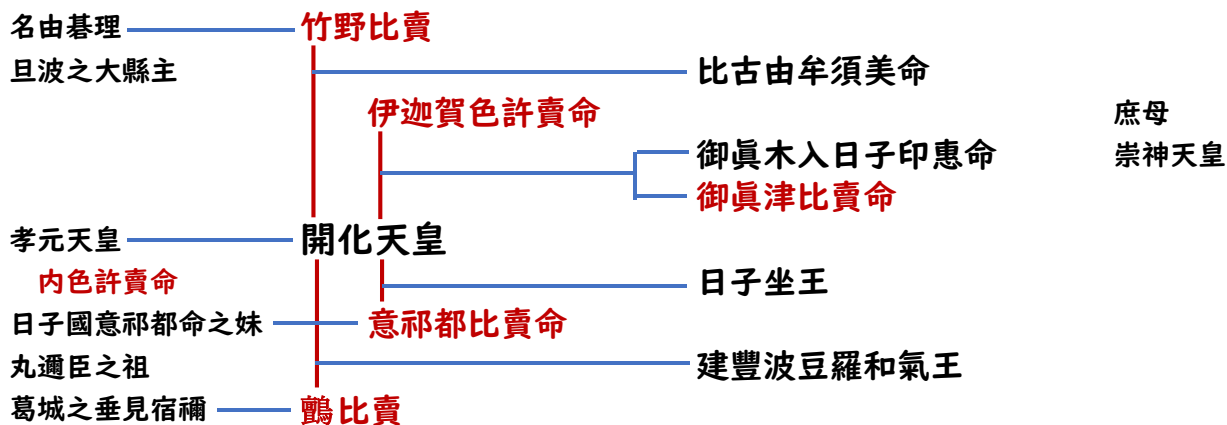


図 20.10B 開化天皇の后妃とその皇子皇女（古事記）

古事記には次の系譜が書かれている。

次は図に書ききれなかった。

建豊波豆羅和氣王は道守臣・忍海部造・御名部造・稻羽忍海部・丹波之竹野別・依網之阿毘古らの祖

Wikipedia「伊香色謎命」では

伊香色謎命は、孝元天皇の妃、開化天皇の皇后。古事記には内色許男命の娘で伊迦賀色許売命(読み方同じ)とある。父は大綜麻杵命で、母は高屋阿波良姫。同母兄に伊香色雄命がいる。彦太忍信命(父は孝元天皇。武内宿禰の祖父(記では父)。磐之媛命の高祖父(記では曾祖父))・崇神天皇(父は開化天皇)の母。

孝元天皇2年(前213年)、孝元天皇の妃となった。開化天皇6年1月14日(前152年2月25日)、亡夫孝元天皇と叔母(伯母)・皇后鬱色謎命の皇子である開化天皇の皇后となった。崇神天皇元年1月13日(前97年2月17日)、崇神天皇の即位と同日に皇太后となった。

Wikipedia「意祁都比売命」では

意祁都比売命は、古代日本の女性。古事記では意祁都比売命、日本書紀では姥津媛と表記する。富士大宮司系図では姉の意祁都比売命が彦初都比売命、妹の袁祁都比売命が表初都比売命と誤記されている。

和珥氏の遠祖である和邇日子押人命の娘であり、兄弟には彦国葺命の

父・彦国姥津命がいるとされる。開化天皇の妃となり、日子坐王を生んだとされる。

日本神話・神社まとめ

[「開化天皇の子供たち\(古事記\)」](#)

[「開化天皇の孫たち\(古事記\)」](#)

綏靖天皇から開化天皇までは欠史八代と言われているが、孝安天皇までの5代と孝霊天皇・孝元天皇・開化天皇の3代では異なる。

%% 後者は吉備が絡んでいる

%% 陵墓の位置と形態 19.1 節

20.11. 崇神天皇(御間城入彦五十瓊殖天皇)の後妃と皇子皇女

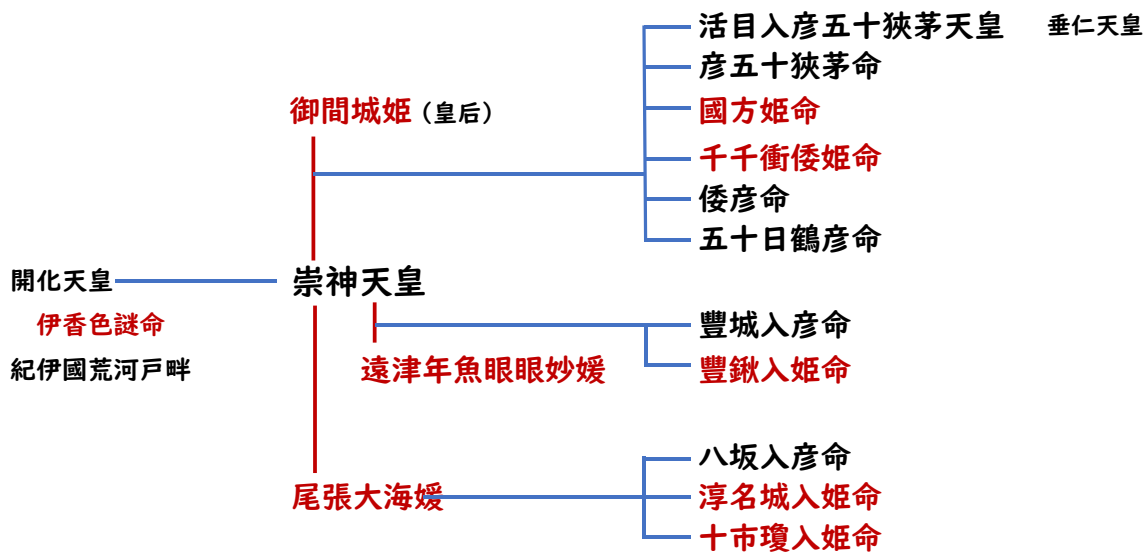


図 20.11A 崇神天皇の後妃とその皇子皇女 (日本書紀)

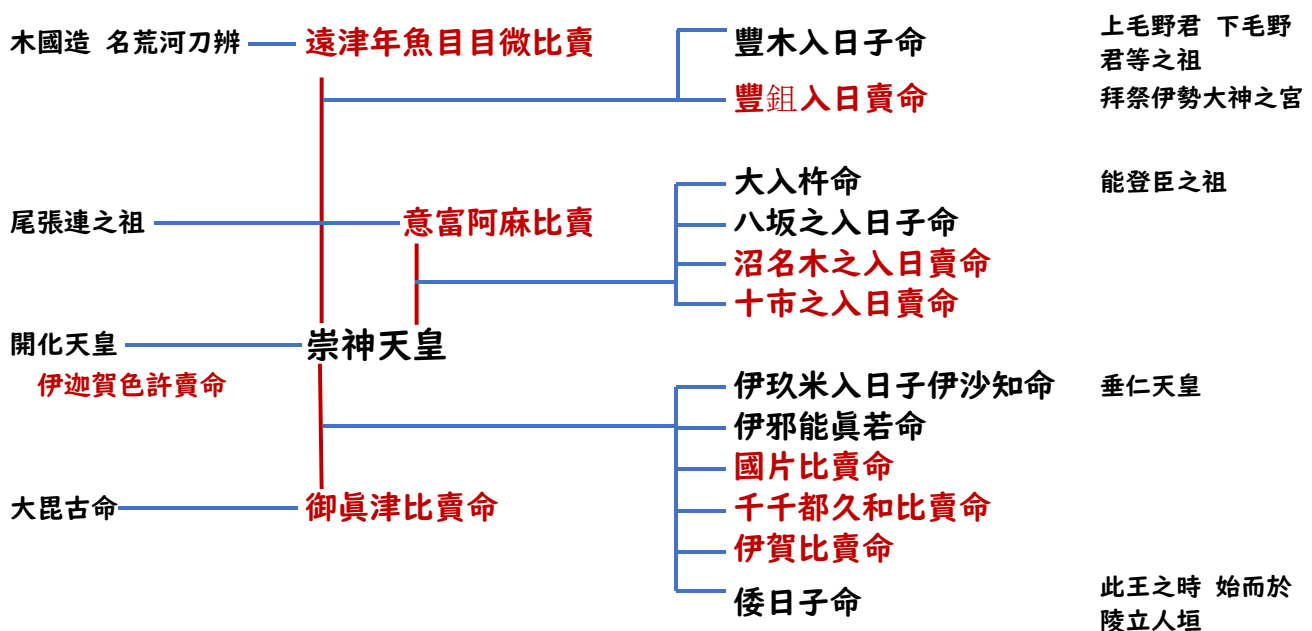


図 20.11B 崇神天皇の後妃とその皇子皇女 (古事記)

並び方が異なるが、后妃の人数は同じで、皇子皇女は古事記のほうが1人多いが、多くは同じ人と思われる。

崇神天皇 68 年に 120 歳で崩御と書かれていることから、53 歳での即位である。

日本書紀では、崇神天皇元年に立後の記事 立御間城姫爲皇后 先是 后生 . . . がある。 . . . には垂仁天皇に始まり、6 人の御間城姫の生んだ子供の名前と、他の后妃とその子女が書かれている。先是がどこまでかかるかがはっきりしない。最小限は、御間城姫を娶る

即位時の年齢が 53 歳ということを考えれば、長子の垂仁天皇 20 年程前に生まれたとしても不自然ではないであろう。これに、崇神天皇の在位年数 68 と垂仁天皇の在位年数 99 を加えれば、 $20+68+99=187$ 、となり、日本書紀に書かれた崩御時の年齢 140 をかなり上回る。

Wikipedia では垂仁天皇の生誕は崇神天皇 29 年となっている。これは、日本書紀の記事から算出したものと思われる。ちなみに、99 年に 140 歳ということから、即位時は 42 歳となる。 $68-42=26$ であるが、かぞえの補正 1 を加えれば 27 となる。

この計算は、崩御年から数えているので、逆算といえる。一方、上の計算法は、生誕年から数えているので、順算といえる。本来ならば、どちらの計算法でも同じ結果となるはずである。ただし、記紀では生年が記され

ているのは極めて稀である。

日本書紀では、崇神天皇の母の伊香色謎命は物部氏の遠祖大綜麻杵の女となっている。

Wikipedia「御間城姫」では

御間城姫は、崇神天皇の皇后。古事記には御真津比売とある。父は大彦命。垂仁天皇の母。父の大彦命は、崇神天皇の父開化天皇の兄(孝元天皇の第一皇子)なので(実際、古事記(武埴安彦の乱の条)は、崇神天皇は大彦命を伯父と呼んでいる)、夫崇神天皇と従兄妹である。

御間城姫と崇神天皇の名御間城入彦五十瓊殖尊が同じ御間城を含んでおり、また、古事記の開化天皇条には崇神天皇(御真木入日子印恵命)の同母妹に后と同名の御真津比売命があることから、二人はもともと同母兄妹の伝承であったのを、記紀編纂時に変えたとの見方もある。

Wikipedia「遠津年魚眼眼妙媛」では、

遠津年魚眼眼妙媛は、古代日本の人物。日本書紀などでは崇神天皇妃となって、所生の皇子豊城入彦命が異母兄弟の生目尊と皇位継承の比較を行う記事が伝えられる。しかし、紀国造一族が天皇の後妃に入る慣習はなく、加えて、異母兄弟とされる活目尊の母は皇后の御間城姫であるから、本来

は皇位継承資格を比較されるはずがないと指摘される。この説では、上毛野国造・下毛野国造一族に御諸別命の名や三輪神の祭祀が見られること、毛野一族の氏姓が三輪君一族の氏姓と類似することなどから、毛野一族を三輪君の同族としている。また、崇神天皇妃としての遠津年魚眼眼妙媛を否定しつつ、三輪君と紀国造家が通婚していること、那波郡式内社の火雷神社や上野国・下野国に多数分布する雷電神社など、毛野地域には紀国造の遠祖神である雷神の祭祀が多数見られることなどから、御諸別命の母系に荒河戸畔の娘があったと指摘されている。

Wikipedia「大彦命」では、

日本書紀では大彦命、古事記では大毘古命と表記される。また稻荷山古墳出土鉄剣の銘文に見える意富比埜に比定する説がある。第8代孝元天皇の第1皇子で、第11代垂仁天皇の外祖父である。また、阿倍臣(阿倍氏)を始めとする諸氏族の祖。四道将軍の1人で、北陸に派遣されたという。

存在が疑問視されている決史8代に繋がる系譜をどう解釈すべきか。

[「崇神天皇の皇后と妃とその子供たち（日本書紀）」](#)

[「崇神天皇の後妃と御子2（古事記）」](#)

古事記の崇神天皇紀で、崇神天皇が大物主大神のお告げにより、河内之

美努村において意富多多泥古人を調べたとき、ある人が次の系譜を述べた。

大物主大神→櫛御方命→飯肩巢見命→建甕槌命→意富多多泥古

津耳命之女 活玉依毘賣

20.12. 垂仁天皇 (活目入彦五十狭茅天皇)

記紀ともに皇后の兄狭穗彦の謀反が書かれている。

日本書紀では狭穗姫皇后の父母については記されていない。

十五年の記事に 喚丹波五女納於掖庭 とある。五女は順に、日葉酢媛、淳葉田瓊入媛、真砥野媛、瓊入媛、竹野媛で、1が皇后、2, 4が妃となっている。

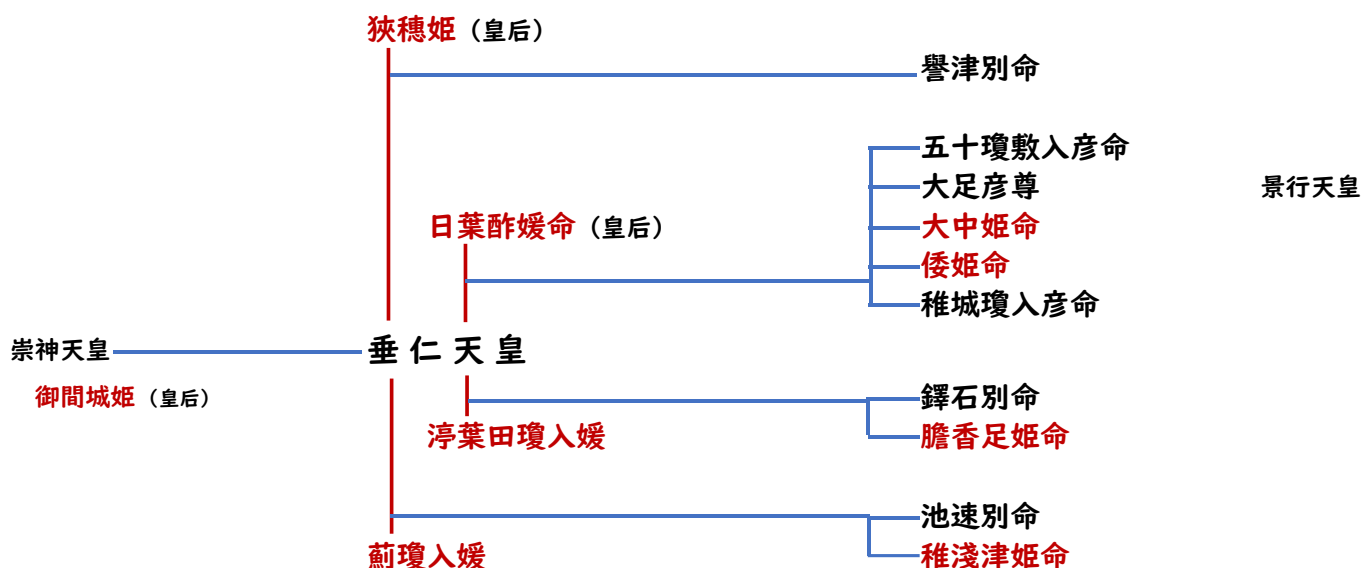


図 20.12A 垂仁天皇の后妃とその皇子皇女 (日本書紀)

狭穗姫を皇后とする記事は二年で、次の記事とは別に載せられている。

十五年二月 喚丹波五女納於掖庭 第一曰日葉酢媛 第二曰淳葉田瓊入媛
 第三曰真砥野媛 第四曰 瓊入媛 第五曰竹野媛 八月 立日葉酢媛命爲皇

后 以皇后弟之三女爲妃 唯竹野媛者 因形姿醜返於本土 則羞其見返 到葛野自墮輿而死之 故號其地謂墮國 今謂弟國訛也

15年2月丹波の五女を喚び、掖庭に納めた。第一は日葉酢媛、第二は淳葉田瓊入媛、第三は眞砥野媛、第四は瓊入媛、第五は竹野媛である。

8月 日葉酢媛命を皇后とした。皇后妹の三女を妃とした。唯竹野媛は、形姿が醜いため本土に返した。・・・

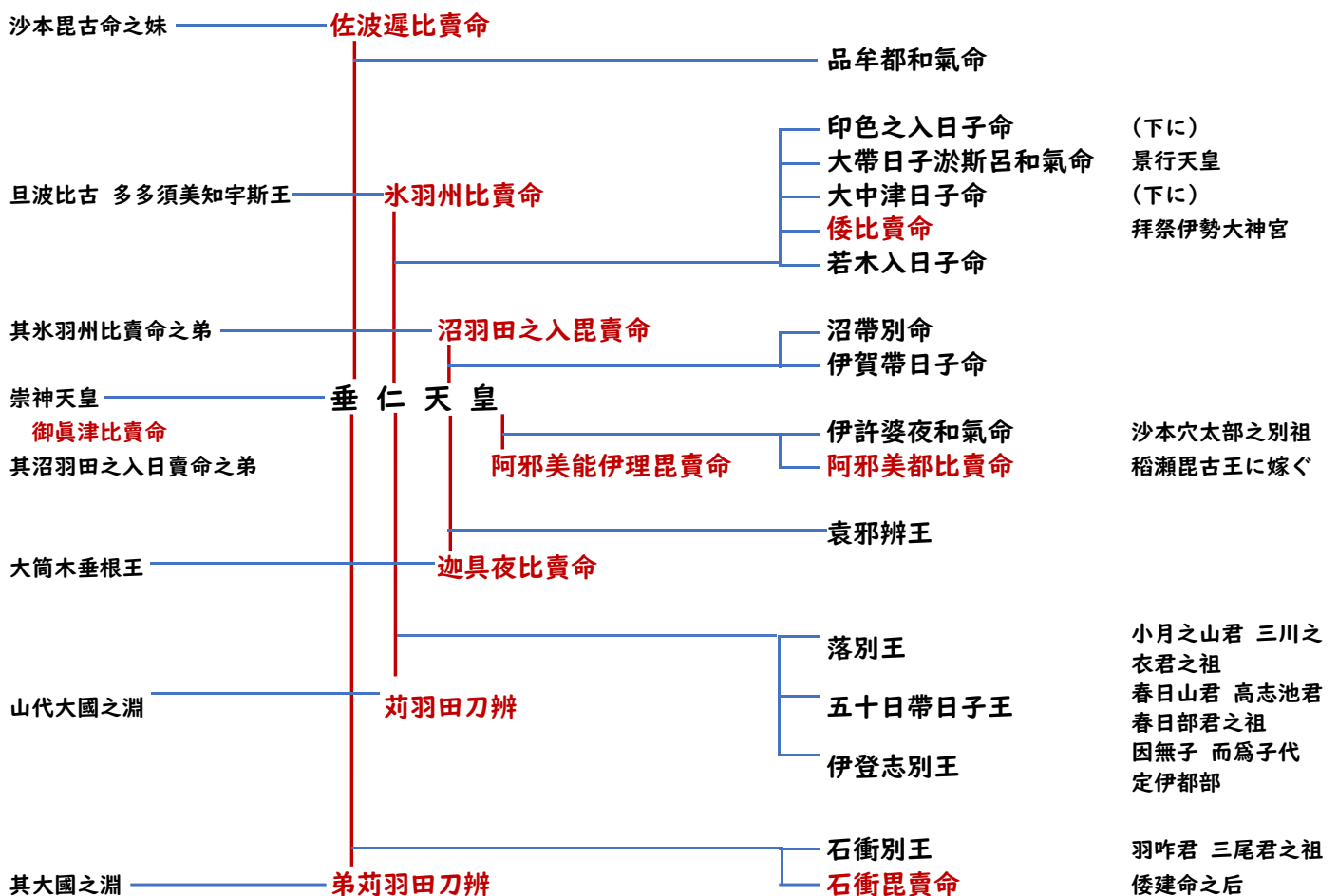


図 20.12B 垂仁天皇の後妃とその皇子皇女 (古事記)

次は表に書ききれなかった。

次印色入日子命者 作血沼池 又作狭山池 又作日下之 高津池 又坐鳥取之
河上宮 令作横刀壹仟口 是奉納石上神宮 即坐其宮 定河上部也 次大中
津日子命者〈山邊之別 三枝之別 稻木之別 阿太之別 尾 張國之三野別 吉
備之石无別 許呂母之別 高巢鹿之別 飛鳥君 牟禮之別等祖也 〉

次の印色入日子命は血沼池・作狭山池・作日下の高津池を作った。また、鳥取の河上宮に坐し、横刀壹仟口を作り、石上神宮に奉納した。そこで、その宮に坐し、河上部を定めた。

次の大中津日子命は山邊之別・三枝之別・稻木之別・阿太之別・尾張國の三野別吉備の石无別・許呂母之別・高巢鹿之別・飛鳥君・牟禮之別らの祖である。

日本書紀の記事から、景行天皇の年齢を考えてみる。

景行天皇の母日葉酢媛命の立后は垂仁天皇 15 年で 35 年に薨じた。次子の景行天皇は遅くとも 20 年には生まれたとする。垂仁天皇の崩御時には $99 - 20 = 79$ 歳となる。これに在位期間の 60 を加え 1 を引けば、138 となり、景行天皇紀の崩御時の年齢 106 歳とはかなり異なる。

崇神天皇紀では 18 年から 47 年までの 30 年間は記事がない。また、垂仁天皇紀では 40 年から 86 年まで 47 年間記事がない。この和は 77 は、年齢の差 47 と 32 の和 79 に近いものとなる。

兄狭穂彦の謀反に関する部分の訳は手に負えないので、Wikipediaの記事を引用する。

Wikipedia「垂仁天皇」狭穂彦の謀反では

即位5年、天皇の従弟にあたる狭穂彦は妹の皇后を唆して天皇を暗殺しようとした。夫と兄のどちらが愛しいか、と問われ、兄、と答えた皇后は短刀を渡され、寝ている天皇を刺せと告げられた。断ることができなかった皇后は、しかしもう少しというところでどうしてもできず天皇にすべてを打ち明けた。天皇は狭穂彦を討伐することにしたが、兄を見捨てられない狭穂姫は自分が生んだ誉津別命を連れて狭穂彦の元に走った。長らく攻めあぐねた天皇がついに狭穂彦の稲城に火をつけると狭穂姫が飛び出してきた。しかし皇后は誉津別命だけを預けて燃える城の中に戻ってしまい、そのまま兄と共に焼け死んでしまった。

古事記では狭穂彦の元に走った皇后は皇子を妊娠しており、稲城で生まれた皇子を渡しに外へ出てきたとある。天皇は屈強な兵士を差し向けて皇后を奪還しようとするが失敗。諦めきれない天皇は子の名付けや育て方、後任の皇后について尋ねて時間稼ぎをしたがついに話すことも無くなり泣く泣く稲城に火を放ち、皇后は兄と共に焼死した。

皇后が謀反に加担するという記事である。誉津別命(本牟都和気命、本牟智和气命、品津別皇子)の記事も少し興味がわく。

Wikipedia「狭穂姫命」

狭穂姫命は、日本の皇族。記紀に伝えられる垂仁天皇の最初の皇后(垂仁天皇2年2月9日立后)で、皇子誉津別命(本牟智和気御子)の生母。同母兄に狭穂彦王(沙本毘古)がおり、垂仁天皇治世下における同王の叛乱の中心人物。日本書紀では狭穂姫命、古事記では沙本毘売命、または佐波遲比売命に作る。

父は彦坐王(開化天皇の皇子)、母は沙本之大闇見戸売(春日建国勝戸売の女)。同母の兄弟として狭穂彦王の他に袁邪本王(次兄。葛野別・近淡海蚊野別の祖)、室毘古王(弟。若狭耳別の祖)がいた(古事記)。

ちなみに垂仁天皇の次の皇后である日葉酢媛命は彦坐王の子である丹波道主王の女であり、姪に当たる。春の女神で同名の佐保姫とは無関係。佐保姫の項、参照。

狭穂彦王の叛乱が古事記中巻の垂仁天皇記と日本書紀垂仁天皇4・5年条において語られている。特に古事記中巻では倭建命の説話と共に叙情的説話として同書中の白眉とも評され、また同じく同母兄妹の悲恋を語る下巻の木梨之軽王と軽大郎女の説話と共に文学性に富む美しい物語とも評されている。

Wikipedia「日葉酢媛命」

日葉酢媛命は、垂仁天皇の2番目の皇后。父は丹波道主王、母は丹波之河上之麻須郎女。垂仁天皇との間に景行天皇のほか2皇子・2皇女を産む。日葉酢媛は日本書紀での記述であるが、同書は日葉酢根命・日葉洲媛命にも作り、また古事記は氷羽州比売命・比婆須比売命に作る。

日本書紀によれば、垂仁天皇の皇后狭穗姫命が同天皇5年に薨じた後、その遺志により、同15年2月甲子(10日)に丹波(後の丹後国を含む広義の丹波国)から妹たちとともに後宮に迎えられた。同年8月壬午(1日)に皇后に立てられた。

垂仁天皇32年7月己卯(6日)に薨じた。その葬儀に際して、それまで行われていた殉死を悪習と嘆じていた天皇が群卿に葬儀の方法を問うと、野見宿禰が生きた人間の代わりに埴輪を埋納するように進言したため、その陵墓に初めて人や馬に見立てた埴輪が埋納され、以後も踏襲されるようになったという。古事記では天皇崩御後も生きており、多遲摩毛理(田道間守)から時じくの香の木の実の半分を受け取ったとされる。

コトバンク「淳葉田瓊入媛」では

記・紀にみえる垂仁天皇の妃。垂仁天皇の皇后狭穗姫が兄狭穗彦の謀反に連座して自殺する前に、後宮にいれることを進言した丹波道主命の5人の娘のひとり。第二妃として鐸石別命,胆香足姫命を生む。古事記では沼羽田之入毗売命。

コトバンク「薊瓊入媛」では

記・紀にみえる垂仁天皇の妃。垂仁天皇 15 年に妃となり、池速別命と稚浅津姫命を生んだ。古事記では阿邪美能伊理毘売とし、伊許婆夜和気命と阿邪美都比売命を生む。

Wikipedia「迦具夜比売命」

迦具夜比売命は、古墳時代の日本の人物。古事記にのみ登場する女性で、大筒木垂根王(比古由牟須美命の子)の娘であり垂仁天皇の後とされる。子は袁邪弁王。

宝賀寿男による異説：迦具夜比売の曾祖母の名が竹野媛、叔父の名が讃岐造に関連する讃岐垂根王であり、父の大筒木垂根王の名も優れた竹細工技術や月神信仰を保有した隼人の居住地である山城国綴喜郡を指すものとし[なぜ?]、この人物がかぐや姫のモデルであるという説がある。また常世信仰や不老不死に繋がる田道間守の伝説を一族に持つ神功皇后の実名と主張している。

コトバンク「苺幡戸辺」では

記・紀にみえる垂仁天皇の妃。日本書紀によれば、垂仁天皇の寵愛を受けて祖別命、五十日足彦命、胆武別命を生んだという。古事記では苺羽田刀弁。

コトバンク「[綺戸辺](#)」では

記・紀にみえる垂仁天皇の妃。大国不遅の娘。磐衝別命を生んだ。古事記では大国淵の娘で弟苅羽田刀弁といい、石衝別王、石衝毘売命を生んだとされる。

Wikipedia「[誉津別命](#)」

日本書紀によると皇子はある日、鵠(今の白鳥)が渡るさまを見て、是何物ぞ、と初めて言葉を発した。天皇は喜び、その鵠を捕まえることを命じる。湯河板拳(鳥取造の祖)が出雲で捕まえて献上し、鵠を遊び相手にすると、誉津別命は言葉を発するようになった。ここに鳥取部・鳥飼部・誉津部を設けたとある。

一方古事記では、天皇は尾張の国の二股に分かれた杉で二股船を作り、それを運んできて、市師池・軽池に浮かべて、皇子とともに戯れた。あるとき皇子は天を往く鵠を見て何かを言おうとしたので、天皇はそれを見て鵠を捕らえるように命じた。鵠は紀伊・播磨・因幡・丹波・但馬・近江・美濃・尾張・信濃・越を飛んだ末に捕らえられた。しかし皇子は鵠を得てもまだ物言わなかった。ある晩、天皇の夢に何者かが現れて、我が宮を天皇の宮のごとく造り直したなら、皇子はしゃべれるようになるだろう、と述べた。そこで天皇は太占で夢に現れたのが何者であるか占わせると、言

語（物言わぬ）は出雲大神の崇りとわかった。天皇は皇子を曙立王・菟上王とともに出雲（現：島根県東部）に遣わし、大神を拝させると皇子はしゃべれるようになったという。その帰り、皇子は肥長比売と婚姻したが、垣間見ると肥長比売が蛇体であったため、畏れて逃げた。すると肥長比売は海原を照らしながら追いかけてきたので、皇子はますます畏れて、船を山に引き上げて大和に逃げ帰った。天皇は皇子が話せるようになったことを知って喜び、菟上王を出雲に返して大神の宮を造らせた。また鳥取部・鳥甘部・品遅部・大湯坐・若湯坐を設けたという。

興味を引くのは、出雲と白鳥が登場することである。

狭穗姫と譽津別命、および、日葉酢媛命・淳葉田瓊入媛までは同じと思われるが。皇子皇女と他の妃は違いが見られる。

[「垂仁天皇（二）皇后と皇子、任那の新羅への恨み\(日本書紀\)」](#)

[「垂仁天皇の後妃と御子\(古事記\)」](#)

[「垂仁天皇の後妃と御子2\(古事記\)」](#)

20.13. 日本武尊

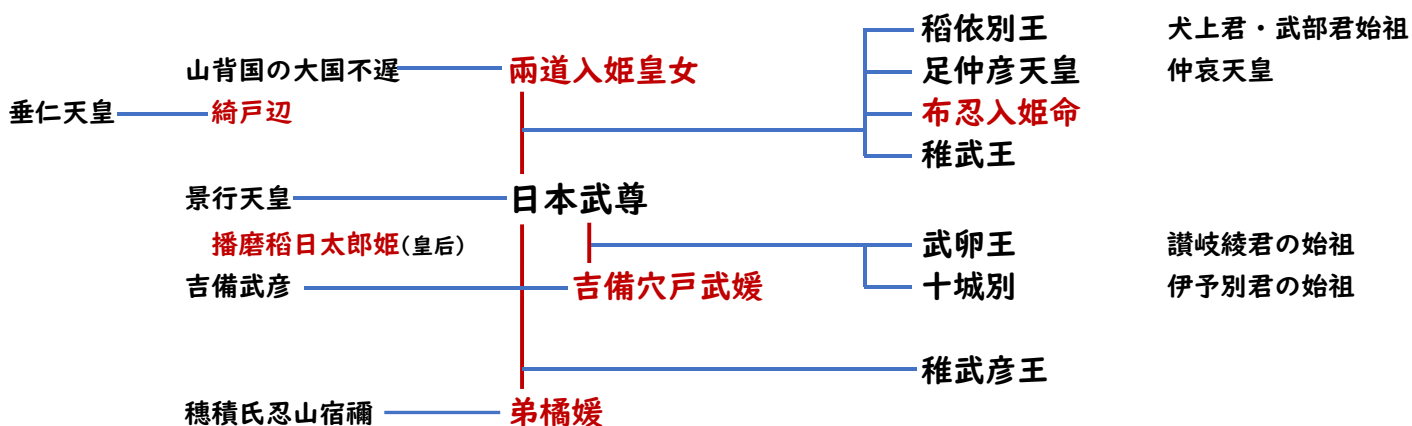


図 20.13A 日本武尊の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

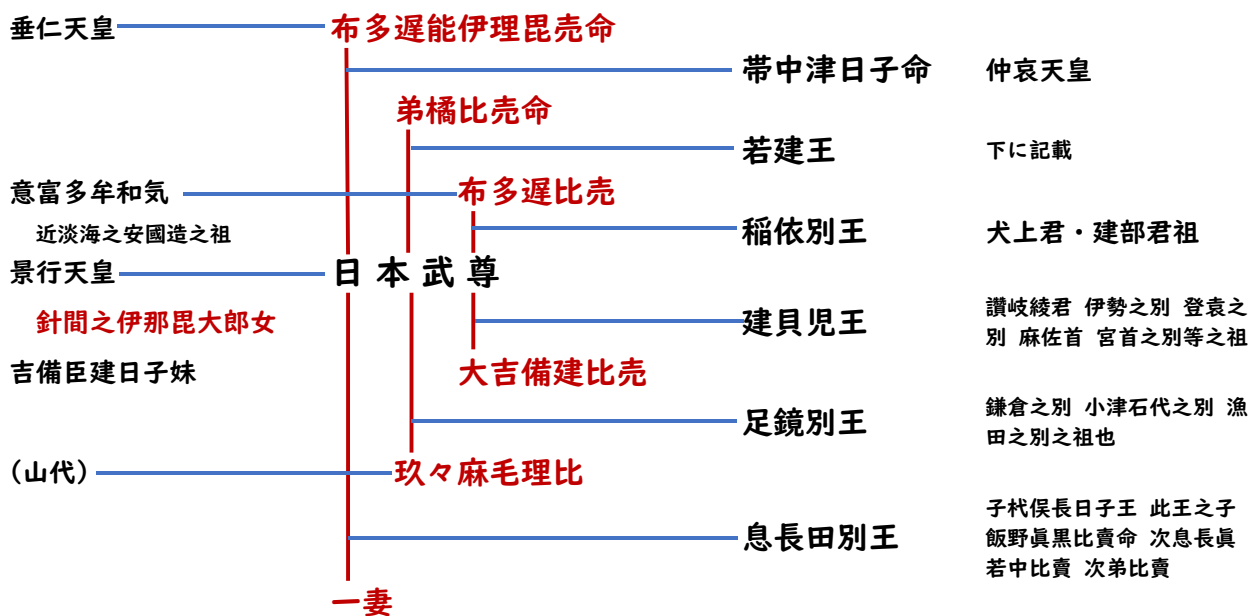


図 20.13B 日本武尊の後妃とその皇子皇女（古事記）

図 X04 の第 1 印象は、これが王子の妃と皇子皇女のリストかということである。天皇のものと言ってもよいほどである。

后妃の人数は、3人と6人で、日本書紀の3人は、兩道入姫皇女は布多遲能伊理毘売命、吉備穴戸武媛は大吉備建比売、弟橘媛は弟橘比売命で漢字表記を除けば同じである。古事記では、各后妃の生む子供は1人で全て甥時である。皇女は兩道入姫皇女の生んだ布忍入姫命のみである。

各皇子の対応を、古事記に書かれた順に見ていく。

布多遲能伊理毘売命の生んだ帶中津日子命(仲哀天皇)は兩道入姫皇女の生んだ足仲彦天皇。

弟橘比売命の生んだ若建王は弟橘媛の生んだ稚武彦王。

布多遲比売の生んだ稻依別王は兩道入姫皇女の生んだ稻依別王。

大吉備建比売の生んだ建貝見王は吉備穴戸武媛の生んだ武卯王。

玖々麻毛理比の生んだ足鏡別王はと一妻の生んだ息長田別王は対応する相手が見つからない。兩道入姫皇女の生んだ稚武王と吉備穴戸武媛の生んだ十城別に対応するとは判定できない。

古事記の後妃から、布多遲比売を削除し、皇子は兩道入姫皇女に、玖々麻毛理比と一妻は削除したようになっている。

古事記がプロトタイプとすれば、上の変更は何故行われたのか。

古事記では、弟橘比賣命は其入海と書かれている。弟橘比賣命の生んだ

若建王の子孫についても書かれている。また一妻の生んだ息長田別王の子とその子3人の名前が書かれている。角辻の記載のない2人の妃の生んだ子供と加羅らの子孫が書かれていることになる。これを系図としてみた。

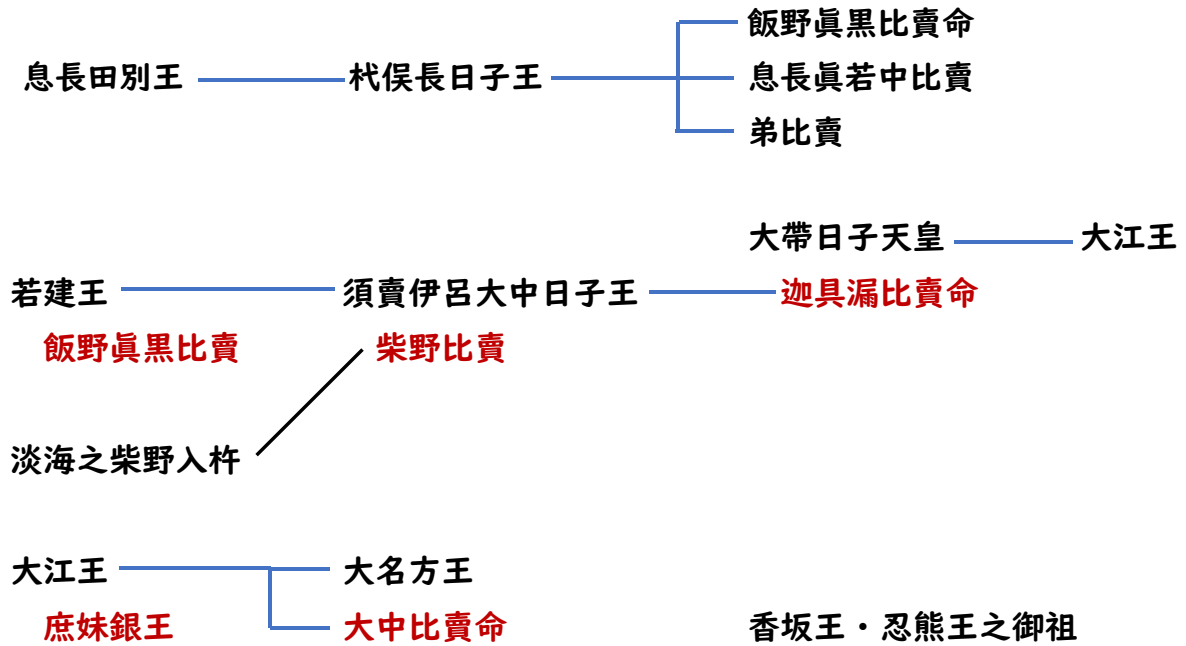


図 20.13C 日本武尊の皇子皇女の子供

Wikipedia「両道入姫命」では、

両道入姫命は、記紀の登場人物。垂仁天皇の皇女で、母は山背国の大国不遲(大国之淵)の娘の綺戸辺(日本書紀より、古事記では弟苅羽田刀弁)。日本書紀では両道入姫命、古事記では石衝毘売命と表記される。同母兄に磐衝別命がいる。

甥の日本武尊の妃となって仲哀天皇を生み、その即位後に皇太后になっ

たとされる。日本書紀には仲哀天皇元年9月1日に“母の皇后を尊びて皇太后と曰す”と記しているものの、父である日本武尊は皇位に就いたことがないため、この時点で彼女が皇后であった事実はなかったことになる。また、古事記・日本書紀ともに彼女に関する具体的な事績の記述を欠いている。そもそも、記紀ともに一致して記載している仲哀天皇の享年から計算できる生年(成務天皇18年)が日本武尊の死去から38年後にあたるという矛盾を抱えており、日本武尊と仲哀天皇、そして両者をつなぐ存在である両道入姫命が本当に実在していたかどうかは不明である。

コトバンク「吉備穴戸武媛」では

記・紀にみえる日本武尊の妃。吉備武彦の娘で吉備穴戸武媛ともいわれる。武卵王と十城別王を生んだ。古事記では吉備建日子の妹で、大吉備建比売といわれ、建貝児王を生んだ。

Wikipedia「弟橘媛」では、

弟橘媛は、日本書紀によれば日本武尊の妃。古事記では倭建命の後・弟橘比売命とする。日本書紀によれば、穂積氏忍山宿禰の娘。日本武尊との間に稚武彦王を儲ける。

布多遲比売・玖々麻毛理比は目に付く記事は無かった。

Wikipedia「建忍山垂根」では、

古事記成務条において、成務天皇の妃である弟財郎女の父として登場する。また日本書紀に記される、日本武尊の妃・弟橘媛の父である穂積忍山宿禰も同一人物とされる。穂積神社、忍山神社の祭神。

系譜に関して日本書紀・古事記に記載はない。

父：大水口宿禰(穂積氏遠祖)、母：葛城宇那毘姫(天戸目命娘)、

子：大木別垂根、孫：穂積真津(穂積氏祖)

娘：弟橘媛、娘：弟財郎女

Wikipedia「穂積氏」では、

穂積氏は、ニギハヤヒの後裔である大水口宿禰を遠祖とする。大水口宿禰の子と伝わる建忍山垂根は古事記に穂積氏祖と記され、娘の弟橘媛は日本武尊の妃となった。また、日本書紀に記される穂積忍山宿禰も建忍山垂根と同一人物とされ、娘の弟財郎女は成務天皇の妃となり和譚奴気王を生んだとされる。

建忍山垂根の子・大木別垂根の子である穂積真津の代に穂積姓を賜ったという伝承を持ち、姓は臣であった。天武13年(684年)11月には、八色の姓制定に伴い52氏のひとつとして穂積朝臣姓を賜った。

犬上君・建部君祖・讃岐綾君・伊勢之別・登袁之別・麻佐首・宮首之別・鎌倉之別・小津石代之別・漁田之別の検索は保留しておく。

「ヤマトタケルの子孫・系譜(古事記)」「解説」から

ヤマトタケルは垂仁天皇の娘の間に仲哀天皇を設けます。また近江・吉備・山代の娘とも結ばれています。系譜からみても、后にしても、単なる皇子とは思えない。ヤマトタケルは神話性が強いがある程度は史実であり、闇に葬られたが、葬りきれなかった英雄。葬りきれないほど人々の心に残っていたのではないのでしょうか。

この記事の最後の部分、ヤマトタケルは闇に葬られたが、葬りきれなかった英雄、ということとは同意見である。

景行天皇紀では、熊襲平定の後、吉備穴濟神と難波柏濟神ら悪神を悉く殺したと書かれている。9.5 節ではこれを考察した。ここでの考察には、古事記のほうが馴染みやすい。

ここでは、日本武尊の東国遠征は、周防から安芸・吉備を転戦し、出雲との戦い中に戦死した話を中部以東に部隊を移したのではないかというのが粗筋である。(粗筋しかない。)

景行天皇廿七年に、16歳で熊襲を撃ち、海路で戻るとき、吉備では悪神

を誅殺し、難波では柏濟の悪神を誅殺した。四十年に東国に出発した。この時の年齢は 29 歳となる。日本書紀では吉備武彦と大伴武日連、古事記では吉備臣らの祖である御鋤友耳建日子が付与された。神武天皇の場合は、日本書紀では諸皇子と舟師、古事記では伊呂兄五瀬命であった。豊国を出発し、安芸をから吉備・讃岐と転戦し出雲との戦いで戦死した。転戦先で勢力下に入った豪族の娘を妃とした。彼女らは生家に留まり子供を育てた。

ここで、豊国に付いて若干の疑問が湧いてきた。朝鮮半島からの最終撤退時期(白村江の戦い)かそれ以前の領土の割譲時に移住してきた人の中に、倭連合王国の構成部族で製錬を行うものの後継者がいたのではないかと。

他では、日本神話・神社まとめ>> [「日本武尊の妃と子女\(日本書紀\)」](#)

また、[「ヤマトタケル 系譜考 その6 若建王の血脈」](#) も面白い。1-5 は

<https://ameblo.jp/reki-sanpo/theme12-10097589190.html> から。

20.14. 景行天皇

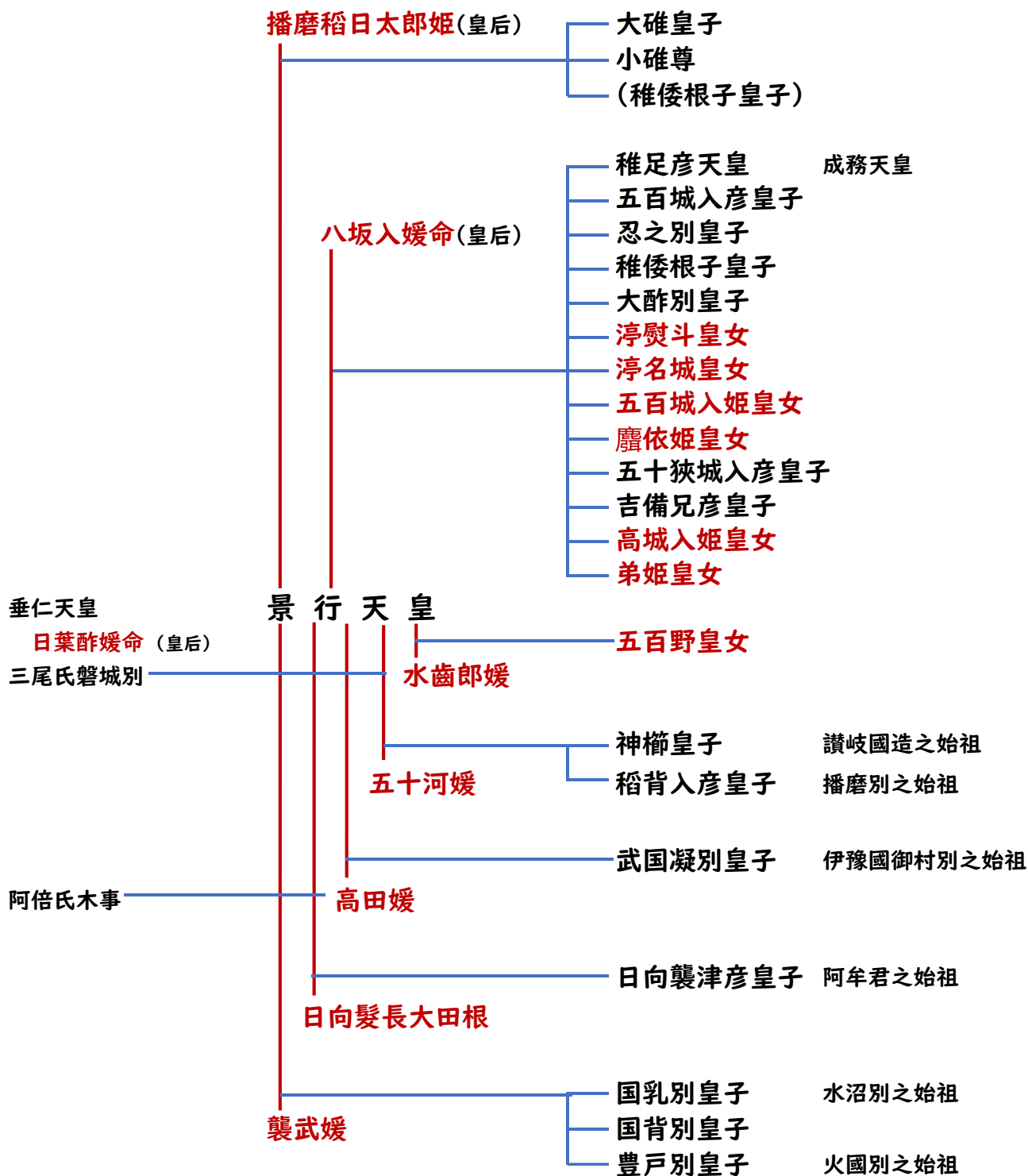


図 20.14A 景行天皇の后妃とその皇子皇女 (日本書紀)

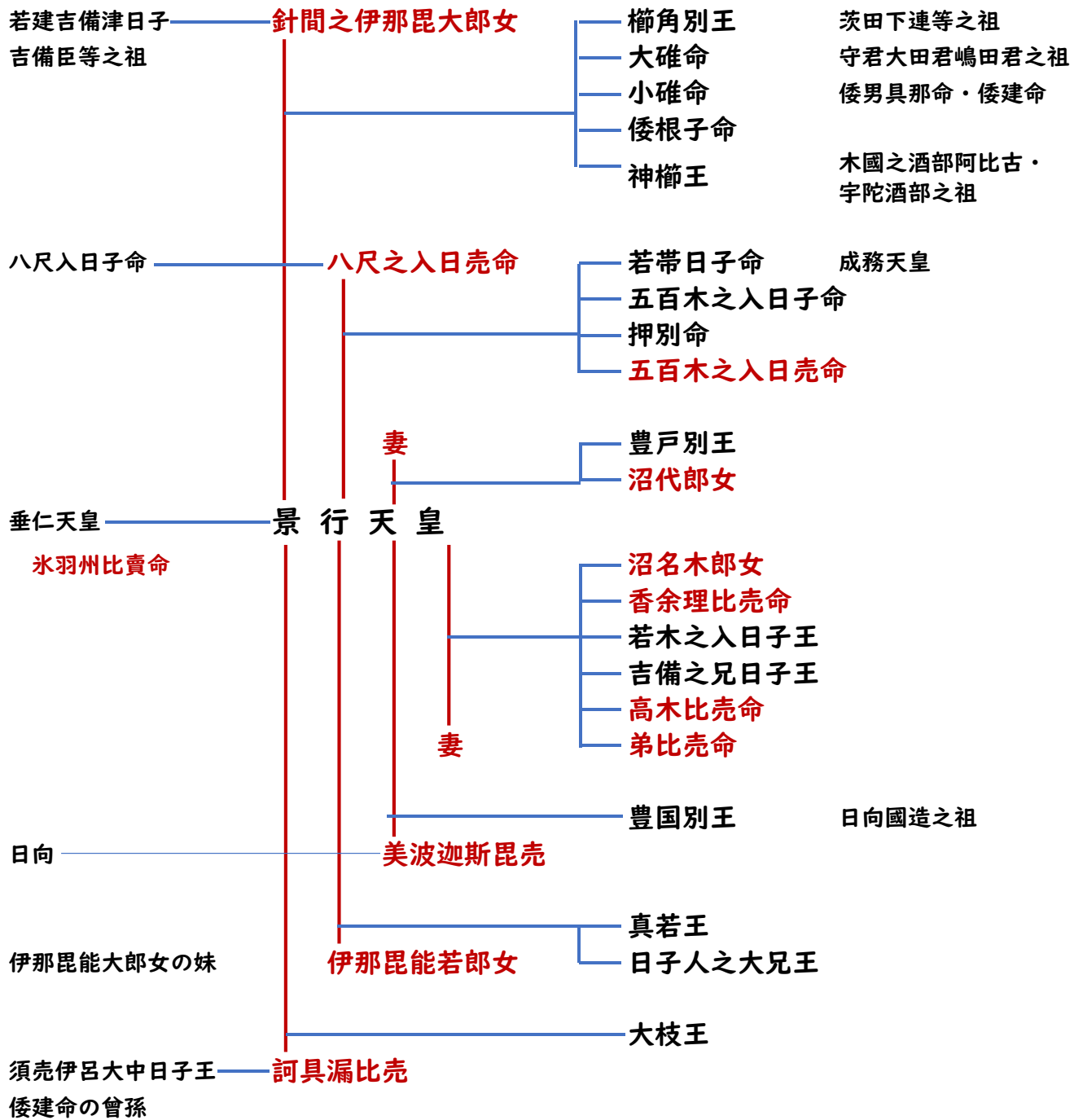
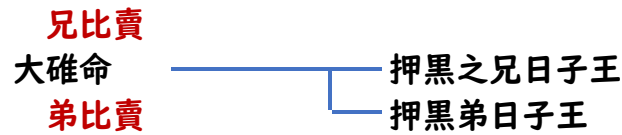


図 20.14B 景行天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

古事記には次の系譜が書かれている。

神大根王之女
神大根王之女



三野之宇泥須和氣の祖
牟宜都君等之祖

図 20.14C 景行天皇の皇子皇女

神大根王は開化天皇の子日子坐王の子であろう。

記紀ともに后妃は 7 人である。子女に関しては、総数は日本書紀で 23 人、古事記では 21 人とそれほど違ってはいない。一方、生んだことについては、かなりの違いがある。例えば、八坂入媛命の産んだ子供は、日本書紀では 13 人、古事記では 4 人となっている。

日本書紀では、景行天皇の子供は 80 人と書かれているが、挙げられている后妃は 7 人である。平均すれば 1 人で 11 人ほど生んだことになる。不可能な数ではないが、多妻制でもあり得るのか。他に、妾がいたのかもしれない。

Wikipedia「徳川家斉」では、妻妾の多さでは名高い、徳川家斉は 16 人の妻妾を持ち、男子 26 人・女子 27 人を儲けたが、成年まで生きたのは半分（28 名）だったと言われる、と書かれている。

垂仁天皇の後妃とその子女での考察で、垂仁天皇の崩御時には 79 歳と

なるとした。立后は、2年に播磨稻日大郎姫と52年の八坂入媛命である。今上天皇のように、即位前に后妃を娶り子女をもうけることは考えるが、古代で行われただろうか。即位後に、18年19年の九州討伐や53年に4カ月で東国巡遊も行っている。

前節と同様に、后妃と子の対応を見ていこう。

針間之伊那毘大郎女は播磨稻日太郎姫に対応する。播磨稻日太郎姫の子は大碓皇子・小碓尊であり、針間之伊那毘大郎女の子の大碓命・小碓命に対応する。他の子は、倭根子命は播磨稻日太郎姫の子の稚倭根子皇子に、神櫛王は五十河媛の子の神櫛皇子に対応するが、櫛角別王は見つからない。

八尺之入日売命の子4人は八坂入媛命の子の、稚足彦天皇・五百城入彦皇子・忍之別皇子・五百城入姫皇女に対応する。

初めの妾の子2人のうち、豊戸別王は襲武媛の子の豊戸別皇子に、沼代郎女は八坂入媛命の子の淳熨斗皇女に対応すると思われる。

もう1人の妾の子6人も全て八坂入媛命の子に対応する。沼名木郎女は淳名城皇女に、香余理比売命は麿依姫皇女に、若木之入日子王は五十狭城入彦皇子に、吉備之兄日子王は吉備兄彦皇子に、高木比売命は高城入姫皇女に、弟比売命は弟姫皇女である。

美波迦斯毘売・伊那毘能若郎女・訶具漏比売の3人は名前からは対応する妃は見つからない。また、子については、美波迦斯毘売の子の豊国別王

は襲武媛の子の国背別皇子に対応すると思われるが、他は対応は見つからない。

Wikipedia「播磨稲日大郎姫」では、

播磨稲日大郎姫は、第12代景行天皇の皇后。日本武尊の母。針間之伊那毘能大郎女・印南別嬢とも。

播磨国風土記：記紀のイナビノオオイラツメは、播磨国風土記の賀古郡・印南郡条に登場する印南別嬢と同一人と考えられる。ワキイラツメの名は、古事記で妹とされ、日本書紀で別名とされたワカイラツメの名に通じる。風土記によれば、印南別嬢の父は丸部臣の祖・比古汝茅(彦汝命か)、母は吉備比売である。景行天皇は印南別嬢を妻問いに播磨へと出向いた。別嬢は身を隠したが、天皇に探し当てられ、2人は城宮(加古川町木村?)で結ばれた。年経て没した後は日岡に墓を造ったが、遺骸を運ぶときに川の中に沈んでしまい、櫛箱と比礼(薄い肩掛け)のみを埋葬したという。しかし彦汝命は成務天皇と同世代であり、印南別嬢の父とする系譜関係に疑問を呈せられることもある。

Wikipedia「八坂入媛命」では、

八坂入媛命は、景行天皇の皇后。古事記には八尺之入日売命とある。父は八坂入彦命(崇神天皇の皇子)で、母は未詳。成務天皇・五百城入彦皇子

ら七男六女の母。

景行天皇 4 年 2 月 21 日、景行天皇の妃となった。元々天皇に見初められたのは同母妹の弟媛であったが、固辞した彼女に推薦されて入内に至ったと伝えられる。同 52 年 5 月 4 日に当初皇后だった播磨稻日大郎姫が崩御したことを受け、同年 7 月 7 日に新たな皇后に立てられた。成務天皇 2 年 11 月 10 日、皇太后となった。

人数が多いので、各皇子皇女の検索は保留する。

[「景行天皇の皇后と皇子 2」](#) 解説「ヤマトタケルの曾孫？」から

景行天皇の子供のオウスが後のヤマトタケル…のはずが、ヤマトタケルの曾孫の娘を景行天皇が娶る、なんてことはオカシイ。矛盾しています。ヤマトタケル、という言葉は「大和の強い男」という意味合いで、本来は個人名ではないはずです。つまりオウスとは別にヤマトタケルなる人物が居たかもしれません。

もう一つの仮説はヤマトタケルの物語が景行天皇よりも前の史実かもしれない、というものです。日本神話はどうやら順番を曲げているよう。実は景行天皇のところにヤマトタケルの物語をぶっこんだ、だけという可能性もあります。ところが辻褄合わせが上手く行かなかった。ヤマトタケルの曾孫なる人物を入れてしまった。それはヤマトタケルの曾孫の名前を

書きたかった（つまりスメイロオオナカツヒコが有力者だった）という意味です。もしくは辻褄が合わなくなっても、ヤマトタケルの曾孫の娘を娶ったという事実を重要に思っていたのかもしれませんが。

続く「個人的コラム」では

ヤマトタケルの曾孫。それで景行天皇の妻。実はこのカグロヒメという女性は応神天皇の妻としても名前が出てきます。

応神天皇の妻の「カグロヒメ」と、ヤマトタケルの曾孫で景行天皇の妻の「カグロヒメ」は名前が同じだけの別人という可能性も——ある、というか、そうなんじゃない??????

ただし、ヤマトタケルの曾孫と景行天皇の妻のカグロヒメは同一人物。これはハッキリと書かれていますからね。古事記の物語上は。

景行天皇と日本武尊に関して同じような感触をもった人がいたことになる。

日本神話・神社まとめ>>

[「景行天皇の妃達とその皇子と皇女\(日本書紀\)」](#)

[「景行天皇の80人の子供、兄遠子と弟遠子と大碓命」](#)

[「景行天皇の皇后と皇子\(古事記\)」](#)

[「景行天皇の皇后と皇子2\(古事記\)」](#)

20.15. 成務天皇

日本書紀には后妃の記載は無い。



図 20.15B 成務天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

在位は60年と長いですが、記事と后妃の数は少ない。

Wikipedia「建忍山垂根」では

建忍山垂根は、古事記等に伝わる古代日本の人物。日本書紀に記される穂積忍山宿禰と同一人物とされる。垂根の根は原始的カバネの一つ。穂積臣の祖とされる。

古事記成務条において、成務天皇の妃である弟財郎女の父として登場する。また日本書紀に記される、日本武尊の妃・弟橘媛の父である穂積忍山宿禰も同一人物とされる。穂積神社、忍山神社の祭神。

% 20.4. 日本武尊 でも引用した

日本神話・神社まとめ >> [「若帯日子天皇は天下を治める」](#) の

「個人コラム」 > 「なぜか雑な扱いを受ける天皇」では

古事記は天武天皇によって律令制を作る軽快のなかの一つで、天皇の血統を証明するものです。ヤマトタケルは確かに皇族だし、その子孫は天皇へとつながりますが、それならヤマトタケルを天皇にしてしまえばいい、と思います。日本人は悲劇が好きで、悲劇があるからこそヤマトタケルの英雄像は際立つのかもしれませんが、志半ばで死んだとて、天皇という位に設定できないのは、妙です。

別の理由があるからではないか？と思います。ヤマトタケルは大和朝廷と敵対していたのかもしれませんが、いや、ヤマトタケルこそが正統な血統で、無視できなかったから、敵対していても、物語として取り込まなくてはいけなかったのかもしれませんが。

その矛盾のほころびが、ヤマトタケルの曾孫と景行天皇が結婚した、という記述に繋がったのではないのでしょうか。

ヤマトタケルは親子ではない。が、つながりはあった。というか天皇側がつながりを望んだ。というべきか。

この天皇紀以降、皇子に対して‘〇〇之祖’という記事が少なくなる。

20.16. 仲哀天皇

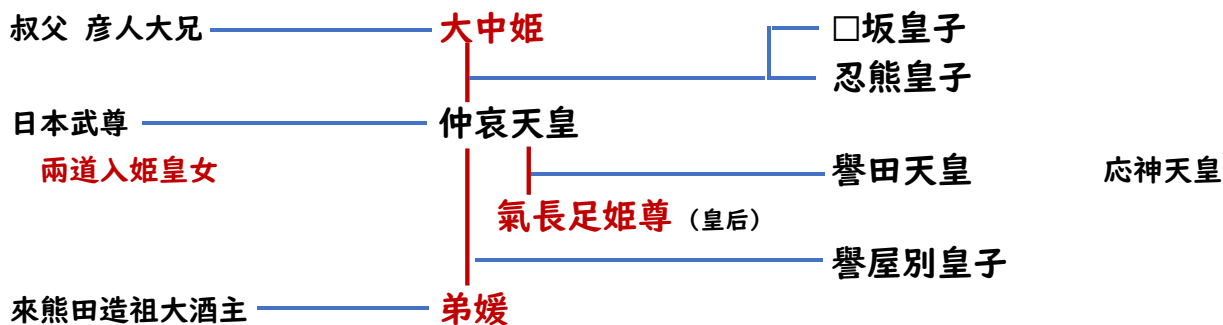


図 20.16A 仲哀天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

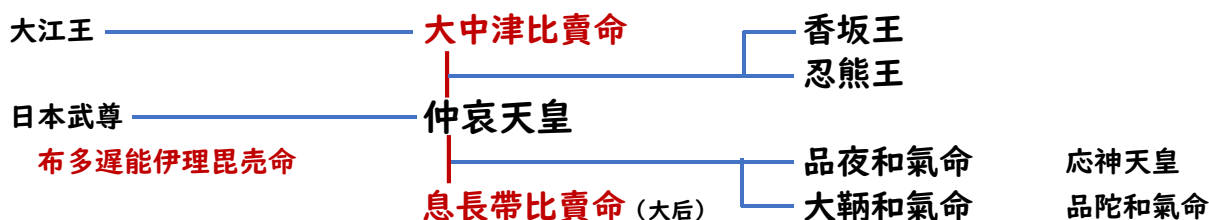


図 20.16B 仲哀天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

日本書紀のほうが妃が1人多いが、ほぼ同じ内容と考える。譽屋別皇子と品夜和氣命は同一人物か。とすれば、日本書紀で、弟媛の生む子として
いるのは何故だろうか。

コトバンク「大中姫」では

記・紀にみえる仲哀天皇の妃。父は景行天皇の皇子彦人大兄。麿坂皇子と忍熊皇子を生んだ。古事記では大中津比賣命。

Wikipediaで大酒主で検索すると、大鹿国直に跳ぶ。

Wikipedia「大鹿国直」では

先代旧事本紀・国造本紀では武蔵国造の祖・兄多毛比命の子とされ、成務天皇の御代に菊麻国造に定められたとされる。百家系図稿では別名を大酒主直としているが、この者は日本書紀に来熊田造の祖と記される。大鹿国直の名について、伊勢大鹿首の先祖が東国の常陸国にも関係したことから、女系を通じた所縁があった可能性もある。

娘の弟媛が仲哀天皇妃となっており、この縁由で一族の五十狭茅宿禰が麿坂皇子、忍熊皇子側に味方したものであると見る説がある。

市原郡妙香村に墓があるとする言い伝えがあり、子には小鹿直がいるとされる。

ここでは、筆者の入手できない文献が引用されている。

[「神がかかる、オキナガタラシヒメ」](#)解説「おそらくは古代の巫女の形」では、

オキナガタラシヒメは神の言葉を受ける媒体(巫女)となり、天皇が琴を弾き、建内宿禰はその巫女の言葉を解釈する。これが日本の古来のシャーマンのありかたであり、信仰であり、儀式だったんでしょう。となると、ここでの天皇の役割はどこまで、脇役。神が降りる巫女、そしてその言葉

を受けて、解釈するサニワ。この二人は、「神」そのもの、もしくは神に近いものです。では天皇はどうでしょう?? 琴を弾いているだけ。
と書かれている。

日本神話・神社まとめ：仲哀天皇

[「皇后と妃とその子息\(日本書紀\)」](#)

[「神がかかる、オキナガタラシヒメ\(古事記\)」](#)

9.6 節で神功皇后に関して齋宮を考察した。

20.17. 応神天皇

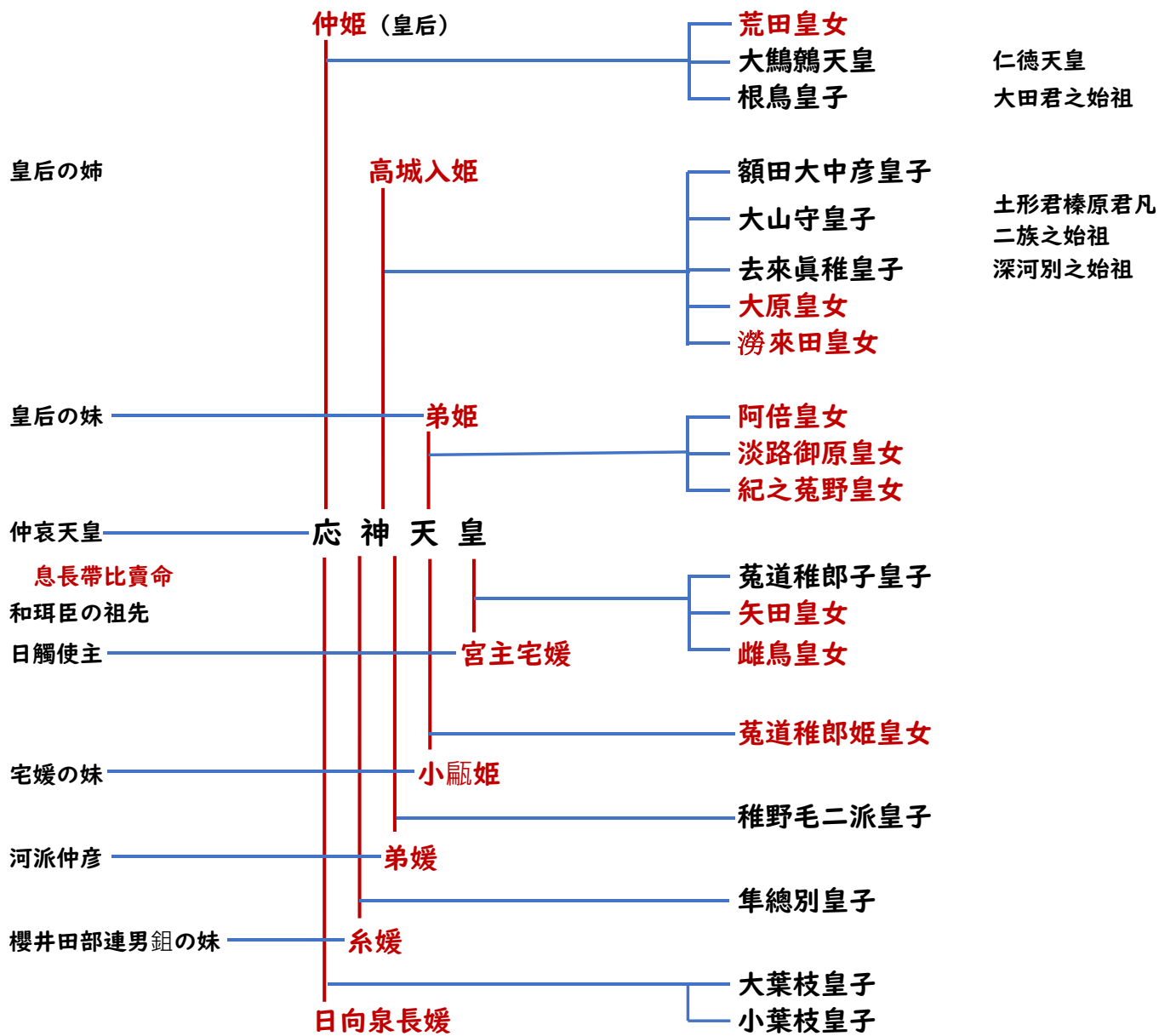


図 20.17A 応神天皇の後妃とその皇子皇女 (日本書紀)

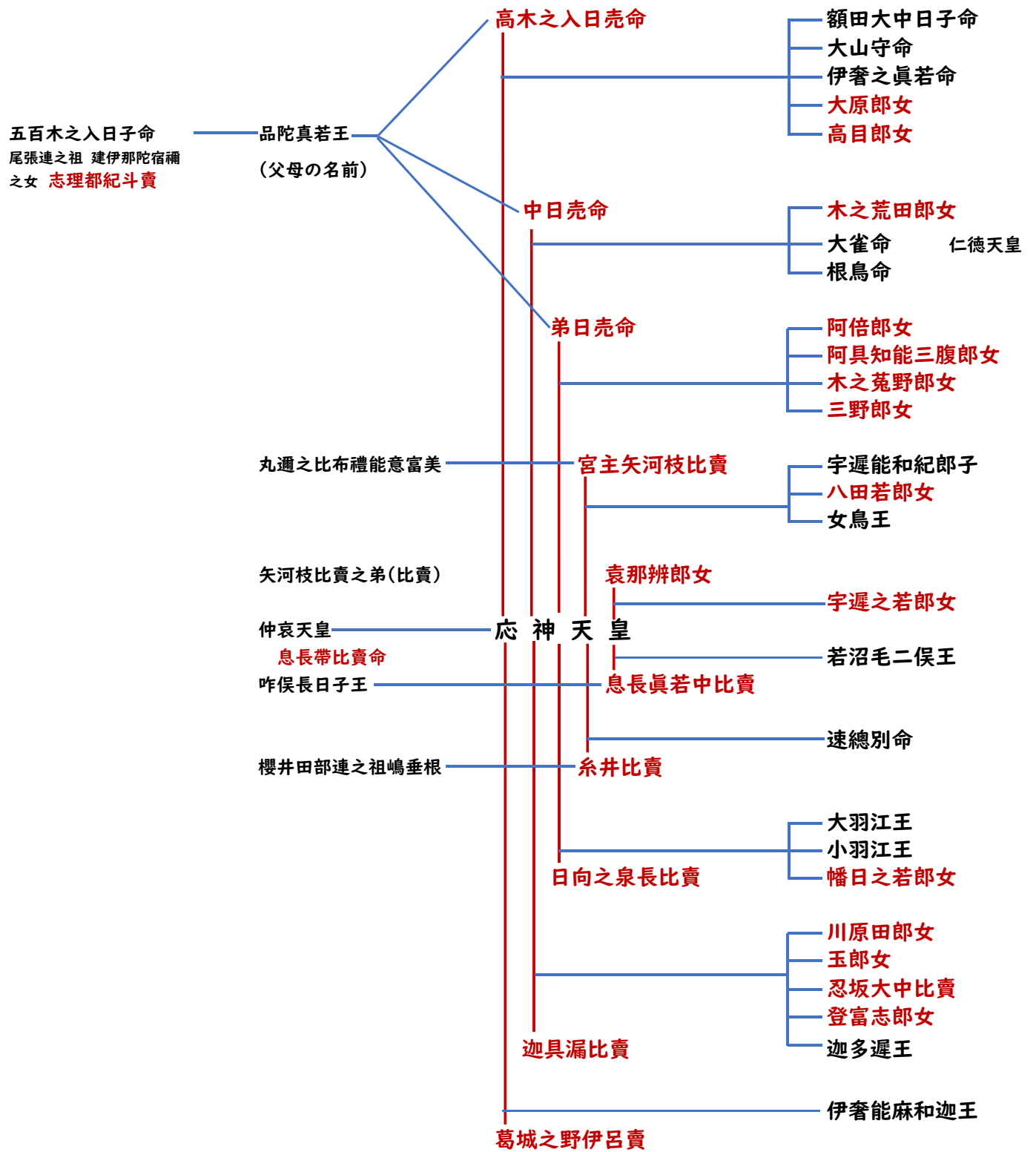


図 20.17B 忘神天皇の後妃とその皇子皇女 (古事記)

古事記では、応神天皇紀の最後に若野毛二俣王と根鳥王の子女が書かれている。

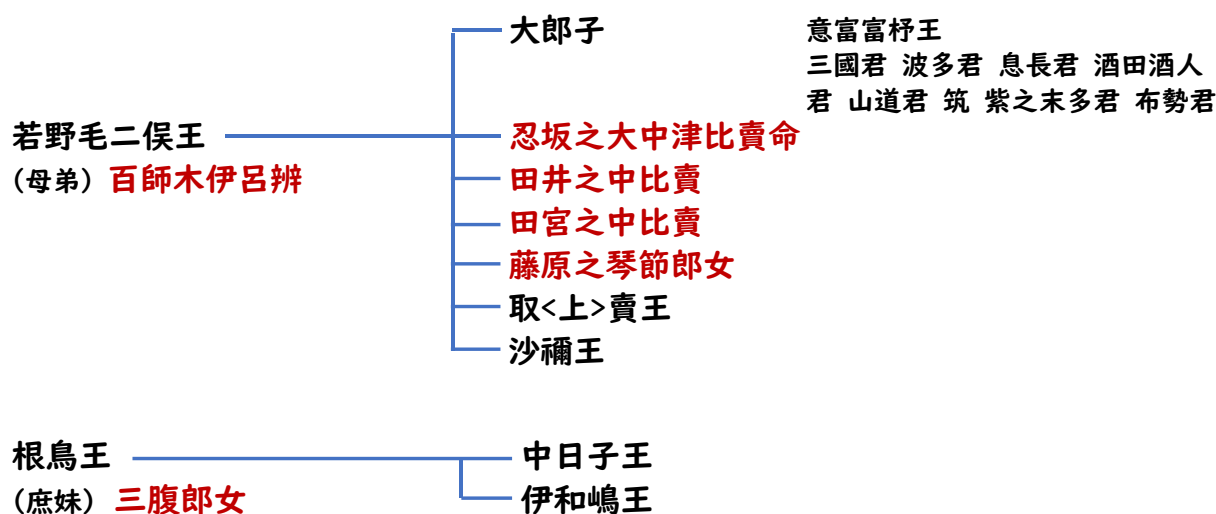


図 20.17C 若野毛二俣王と根鳥王の皇子皇女

応神天皇紀から、仲哀天皇 9 年に生まれた。翌年は神功皇后摂政元年となる。摂政 3 年(数え 4 歳)に皇太子となる。神功皇后の崩御は摂政 69 年であるから、応神天皇元年では 71 歳となる。

后妃の人数は、古事記では 10 人日本書紀では 8 人、子の数は、古事記では 27 人日本書紀では 19 人である。また、后妃の上から 3 人は姉妹となっている。他の妃と皇子皇女の対応を、人数の少ない、日本書紀から見ていこう。

先ず妃については、宮主宅媛は宮主矢河枝比賣に、小甕姫は袁那辨郎女

に、弟媛は息長真若中比賣に、糸媛は糸井比賣に、日向泉長媛は泉長比賣に対応させられる。古事記からは、初めから8人が対応し、残りは迦具漏比賣と野伊呂賣となる。

皇子皇女については、高城入姫の子の去來真稚皇子と澗來田皇女を除けば、母の後妃とともに対応が付く。この2名には、高木之入日売命の子の伊奢之真若命と高目郎女を対応させれば、日本書紀の後妃と皇子皇女は全て古事記の後妃と皇子皇女に対応することになる。

対応の付かないのは、弟日売命の子の三野郎女、泉長比賣の子の幡日之若郎女、迦具漏比賣とその子、野伊呂賣とその子となる。

日本書紀では、3姉妹と姉妹の2組を皇妃とした。

日本神話・神社まとめ>用語・神名など> [「五百木之入日子命」](#)

> 応神天皇（古事記）> [「品陀真若王と娘たち」](#)

に五百木之入日子命と品陀真若王の子女がまとめられている。

Wikipedia「仲姫命」では

仲姫命は、応神天皇の皇后。古事記は中日売命に作る。品陀真若王(五百城入彦皇子の王子、景行天皇の孫王)の王女で、母は金田屋野姫命(建稲種命の女)。応神天皇との間に仁徳天皇を儲ける。仲津姫命とも。ちなみに同母姉の高城入姫命や同母妹の弟姫命も応神天皇の妃となっている。

応神天皇 2 年 2 月 3 日、応神天皇の皇后に立后された。仁徳天皇元年 1 月 3 日、仁徳天皇の即位と同日に皇太后となった。

Wikipedia「高城入姫命」では

高城入姫命は、記紀に伝えられる古墳時代の皇族(王族)。古事記は高木之入日売命に作る。父は品陀真若王(五百城入彦皇子の王子、景行天皇の孫王)で、母は金田屋野姫命(建稻種命の女)。応神天皇の妃の一人で、額田大中彦皇子、大山守皇子、去来真稚皇子、大原皇女、澁来田皇女の生母。同母妹の仲姫命は応神天皇の皇后で、弟姫命も応神天皇の妃となっている。

日本書紀巻第十によると、仲姫命が応神天皇の皇后になる前に妃となり、額田大中彦皇子、大山守皇子などを生んだとある。古事記にも同様の記述がある。

応神天皇は、五百城入彦皇子の孫にあたる 3 人の皇女を娶っている。書紀巻第七によると、五百城入彦皇子は、稚足彦(成務天皇)、日本武尊とともに、景行天皇の皇子の中で地方に派遣されぬまま、天皇の膝元にとどめ置かれており、古事記ではこの 3 人が太子とされている。井上光貞は、成務天皇・仲哀天皇の名前が後世風で、帝紀に記された景行天皇の元々の後継者は五百城入彦皇子であり、ヤマトタケル・神功皇后が挿入された結果、2 名の架空の天皇の系譜が作られたのではないか、すなわち、三姉妹は、崇神天皇の系譜と応神天皇の系譜を繋ぐ役割を果たしており、応神天皇は

品陀真若王の 3 人の娘の入り婿として後を継いだのではないかという説をあげている。その根拠として、五百木入彦・高城入姫という名前に共通するイリという語句がそのことを象徴しているのではないかとしている。

高城入姫命自身については、何の事績も伝わっていない。

Wikipedia「弟姫命」では

弟姫命は、記紀に伝えられる古墳時代の皇族(王族)。古事記は弟日売命に作る。父は品陀真若王(五百城入彦皇子の王子、景行天皇の孫王)で、母は金田屋野姫命(建稻種命の女)。応神天皇の妃の一人で、阿倍皇女、淡路御原皇女、紀之菟野皇女の生母。古事記には、さらに三野郎女が加えられている。同母妹の仲姫命は応神天皇の皇后で、姉の高城入姫命も応神天皇の妃となっている。

日本書紀巻第十によると、“又妃、皇后の弟弟姫、阿倍皇女、淡路御原皇女、紀之菟野皇女を生めり”とあり、古事記では、“弟日売命の御子、阿倍郎女、阿具知能三腹郎女、次に木之菟野皇女、次に三野郎女五柱”とあって、一致していない。古事記の方も正確には四柱である。

実は記紀の応神天皇の後妃と、子供の数は一致しておらず、伝承の混乱の跡が見られる。古事記では皇子 12 人、皇女 15 人であるのに対して、書紀では皇子 10 人、皇女 9 人で、さらにそれぞれ計 26 人、20 人という数え間違いもしている。

皇女の一人、淡路御原皇女という名前には、大和政権と淡路島との深い関係が示されている。

応神天皇は、五百城入彦皇子の孫にあたる3人の皇女を娶っている。このため、井上光貞は、応神天皇は品陀真若王の3人の娘の入り婿になることで皇位を継承することができ、三姉妹は崇神天皇の系譜と応神天皇の系譜を繋ぐ役割を果たしているのではないかと、という説をあげているが、五百木入彦・高城入姫という名前を分解すると、イオ・タカ・キ・イリという美称の羅列でしかなく、実体性・実在性がなくなるといった考えを瀧音能之は紹介している。どちらの説が正しいのかについては、定説が生まれてはいない。

弟姫命自身については、何の事績も伝わっていない。

「宮道宅媛」 <https://blog.goo.ne.jp/kunorikunori/e/4285f7689c225dc09a29b6c0acccf433>

応神天皇の妻である宮道宅媛

古事記日本書紀によれば、応神天皇と和珥氏(丸邇氏)祖の日触使主(比布礼能意富美)の女の宮主宅媛(宮主矢河枝比売)の息子である菟道稚郎子と Wikipedia に記載があるので、宮道宅媛は和邇氏である。そして、興味を引く論文(レポート)を見つけたので、ご紹介したく思います。

http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/1496/1/0030_071_001.pdf

4 ページ上段の中ほど “名代氏族の名を負った…” あたりから 5 ページの

下段、6 ページの中ほどから後半には佐々木のことにもまで及んでいます。

そして、7・8 ページ

“…問題は応神が伊吹まで后妃を娶りに来るかということであるが、それは宇治稚郎子の出生に関する記事が参考になる。彼の母は紀に和珥臣の祖日触使主の女、宮主宅媛とし、記は丸迹の比布礼能意富美の女、宮主矢河枝比売とし…和邇氏は大和北方春日を根拠地とし、宮道は更に北、南山城の宇治郡である。古事記によれば、ある時、天皇は近淡海国に行幸の途次、宇遅野に立ち寄り、葛野の方を望んで歌をよみ、そして木幡村に至ったところで、麗美な嬢子と道衢で出遇った。天皇が“汝は誰の子か”と問うと、“丸迹の比布礼能意富美の女、名は宮主矢河枝比売”と答えた。天皇は其の嬢子に“吾、明日、還幸の時に、汝の家に入り坐さん”と。矢河枝比売は委曲を其の父に語った。そこで父が曰うには“是は天皇に坐すなり。恐し。我が子、仕へ奉れ”と云って、其の家を厳飾し候待していたところ、果たして次の日天皇がやってきた。そして云々、宇治稚郎子が生まれたというわけである。古事記はこの後、日向髪長媛についても詳しく述べる。日本書紀は六年春二月に、“天皇幸近江国。至菟道野上而歌之曰”として歌を記すだけだが、髪長媛については一三年条に詳しく記す。いずれにせよ三女王との馴初めについては、記紀ともに記さない。しかし宮道宅媛との出会いのそもそものきっかけは、天皇が近江に行幸したことであった。この近江行幸こそ、三女王との納采ではなかったろうか。たとえそ

うでなくとも、大和北部あるいは山城南部出身の女性所生の皇子が宇治に宮を営んで居したように、西濃出身女性所生のササギ（仁徳）が近江蒲生にいたとしても不思議ではないのである。…”とあります。

中途半端な記事ですが、少し宮道宅媛のことをご紹介できたのでは~と思います。

[「応神天皇の後妃と御子」](#)「解説」から

ホンダワケのホンダは大阪府羽曳野市誉田から来ているよう。ワケは褒め称える言葉で意味合いとしては誉田の王という感じ。

軽島は奈良県橿原市大軽町のあたりのこと。宮に関してはこのあたりで、ハッキリしたことはわからない。

[「応神天皇の後妃と御子たち2\(古事記\)」](#)解説「迦具漏比売（カグロヒメ）」から

ヤマトタケルの曾孫にして、ヤマトタケルの父親である景行天皇の妻の一人という矛盾を抱える名前がここにも。

こう矛盾が多いと、このカグロという名前は女性の名前としては珍しくないか、エヒメ・オトヒメが単に姉妹姫というニュアンスで使われているのと同じようなもので、単純に地名か容姿を現す言葉ではないか？ と思います。

[「応神天皇の子供達まとめ」](#) 解説「[応神天皇と神武天皇](#)」から

神功皇后と応神天皇が畿内へと帰るといふことと、神武天皇の東征は似た形式を取っている。これは畿内の「神は海からやってくる」といふ世界観がある。これは応神天皇と神武天皇が、どちらも「王朝の始祖」だったからではないか？と考えられている。そういえば神武天皇の記述と子孫の量に対してその後の天皇のそっけないこと。そして応神天皇の子供の量。これはこの天皇に始祖を結び付けたい「氏族」が多かったという意味だろう。もう一つ、崇神天皇がいる。崇神天皇も王朝の始祖ではないか？と言われる天皇。もしくは神武天皇と崇神天皇は同一人物の前半生と後半生ではないか？という説もある。この崇神天皇と前の天皇のもう一つの共通点が「神」といふ字。うーん。なんともねえ。言えないけど面白い話だよねえ。

これは、三神一体説の基になった感想に通じると思われる。

日本神話・神社まとめ： 応神天皇

[「即位、后と妃と子息子女\(日本書紀\)」](#)

[「応神天皇の後妃と御子たち」](#)、[「ホムダノマワカ王の娘の子供達」](#)

[「ホムダノマワカ王の娘の子供達」](#)、[「矢河枝比売との子供」](#)

[「応神天皇の皇后と妃と御子たち\(古事記\)」](#)

[「応神天皇の後妃と御子たち 2 \(古事記\)」](#)

[「応神天皇の子供達まとめ\(古事記\)」](#)

[「応神天皇の子孫」](#)、[「応神天皇の子孫 2」](#)

20.18. 仁徳天皇

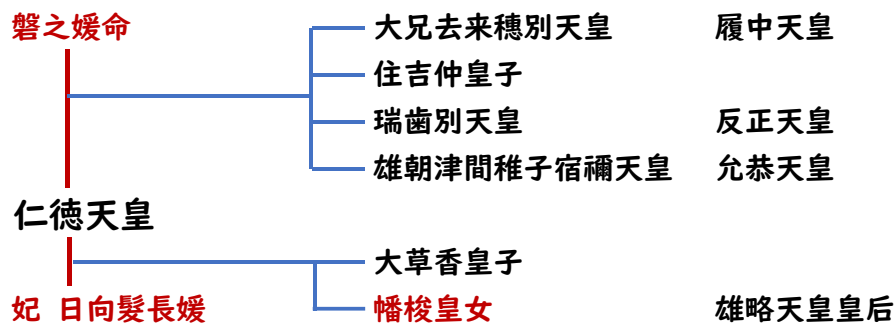


図 20.18A 仁徳天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

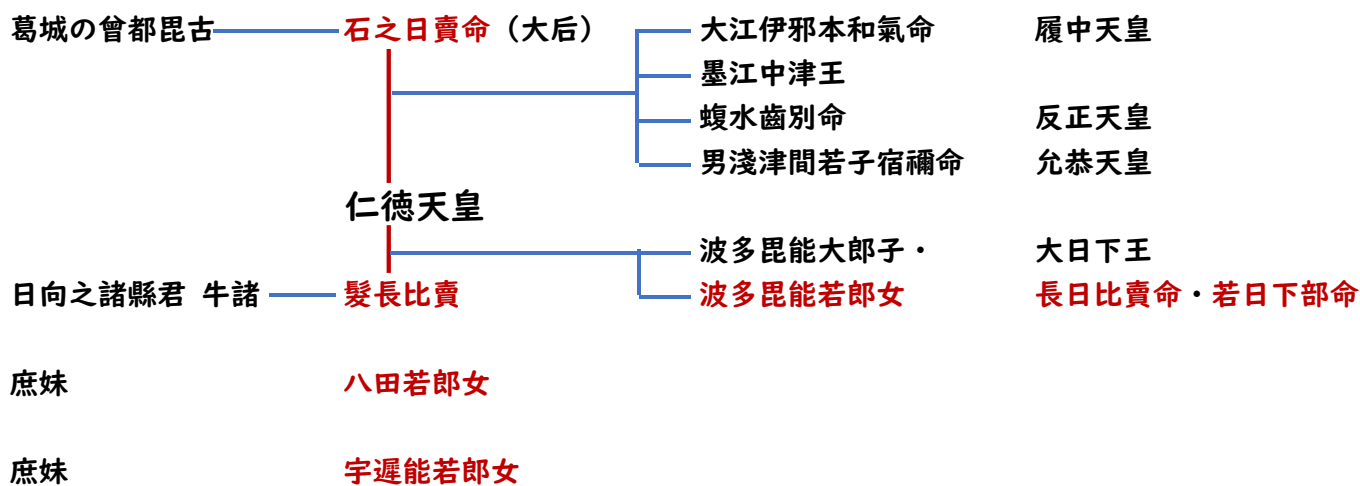


図 20.18B 仁徳天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

在位期間が長いが、2人と4人と后妃は少ない。

磐之媛命と髪長媛については記紀とも同じである。

Wikipedia「磐之媛命」では

磐之媛命は、古墳時代の皇妃。日本書紀では磐之媛、古事記では石之日売、その他、いはのひめ、磐姫とも記す。仁徳天皇の4人の皇后のうちのひとり。仁徳天皇2年に立后。葛城襲津彦の娘で、武内宿禰の孫にあたり、皇族外の身分から皇后となった初例とされる。孝元天皇の男系来孫(古事記では玄孫)。仁徳天皇の男御子5人のうちの4人(履中天皇・住吉仲皇子・反正天皇・允恭天皇)の母。記紀によるととても嫉妬深く、仁徳天皇30年に、彼女が熊野に遊びに出た隙に夫の仁徳天皇が八田皇女(仁徳の異母妹。磐之媛命崩御後、仁徳天皇の皇后)を宮中に入れたことに激怒し、山城の筒城宮(現在の京都府京田辺市多々羅付近)に移り、同地で没した。

Wikipedia「八田皇女」では

八田皇女は、第16代仁徳天皇の皇后。日本書紀では八田皇女・矢田皇女、古事記では八田若郎女と表記される。

第15代応神天皇と和珥臣祖の日触使主(比布礼能意富美)の女の宮主宅媛(宮主矢河枝比売)との間に生まれた皇女である。同母兄妹として菟道稚郎子皇子、雌鳥皇女がいる。夫は仁徳天皇で、異母兄にあたる。子女はいない。なお先代旧事本紀では、母は物部多遲摩連の女の山無媛とする。

日本書紀によれば、応神天皇の崩御後、大鷦鷯尊(仁徳天皇)と菟道稚郎子は皇位を譲り合っていたが、空位のまま3年が経ち、菟道稚郎子は自らの命を断った。その際、大鷦鷯尊に妹の八田皇女を後宮に納れるよう遺言

した。大鷦鷯尊は即位して仁徳2年に磐之媛命を皇后に立てるが、磐之媛命は嫉妬深い女性であり、仁徳天皇(大鷦鷯尊)が八田皇女を妃とすることを許さなかった。しかし天皇は仁徳30年に皇后の留守中に宮中へ納れ、怒った皇后は帰ることなく仁徳35年に筒城宮で亡くなった。そして天皇は仁徳38年に八田皇女を皇后に立てたという。その後、仁徳40年に皇后の同母妹の雌鳥皇女を妃としようとしたが、隼別皇子が皇女と通じてしまう。天皇は皇后の言を尊重して罰しなかったが、謀反の心があるとして殺された。この時皇后の願いにより皇女の足玉手玉は奪わぬよう追手に命じるが、その禁は破られる。皇后の告発により、その犯人は私地を献じて死を免れたという。古事記でも概ね同様の所伝を記すが、菟道稚郎子の自殺や遺言の話はなく、大后(皇后)になったことも明記されてはいない。

[「后と妃と子息子女\(日本書紀\)」](#) 解説「磐之媛命」から

日本書紀の続編ともいうべき続日本紀では光明皇后(聖武天皇の皇后で別名光明子)の即位が書かれています。光明皇后は皇族ではない皇后です。その光明皇后の即位の記述のところに、光明皇后よりも以前に皇族ではない皇后として挙げられた例が磐之媛命です。

磐之媛命はご存知というべきか葛城氏のソツヒコの娘です。ソツヒコは朝鮮半島の専門家で、おそらく中国や朝鮮の文化を持ち込んだ人物なんじゃないかと。

日本神話・神社まとめ

[「后と妃と息子子女\(日本書紀\)」](#)

[「大雀命の皇后と子供\(古事記\)」](#)

20.19. 履中天皇

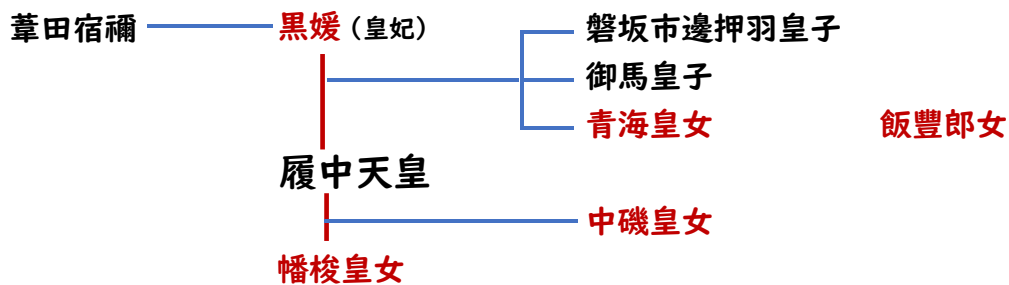


図 20.19A 履中天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

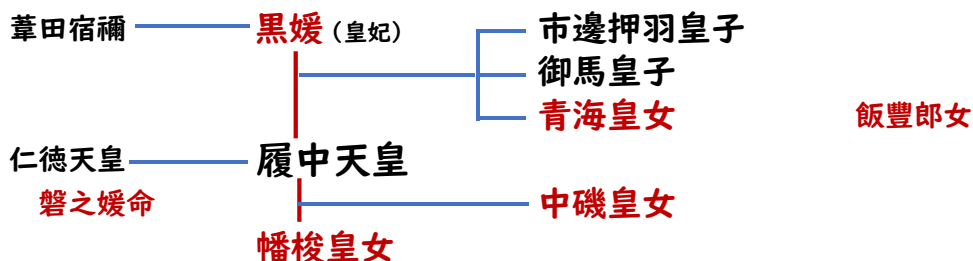


図 20.19B 履中天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「草香幡梭皇女」では

草香幡梭皇女は、第 17 代履中天皇の皇后。古事記には幡日之若郎女とある。父は応神天皇、母は日向泉長媛。中蒂姫命(大草香皇子の妃・眉輪王の母、後に安康天皇の皇后)の母。履中天皇元年 7 月 4 日、葛城黒媛(磐坂市辺押磐皇子・青海皇女を産む)と共に履中天皇の妃となった。同 5 年 9 月 19 日の皇妃黒媛の死を受け、翌同 6 年 1 月 6 日に履中天皇の皇后に立てられた。古来、第 21 代雄略天皇の皇后である草香幡梭姫皇女と同一

人物であるとする説もある。

[「伊弉本和氣王の後と子息\(古事記\)」](#) 解説「葛城曾都毘古」から

葛城曾都毘古は仁徳天皇の嫉妬深い大后石之日売の父親です。葛城曾都毘古の子の葦田宿禰の子の黒比売ということは葛城曾都毘古から見ると孫にあたります。ちなみに履中天皇は石之日売の子供ですから、葛城曾都毘古から見ると孫同士が結婚したということになります。これはつまり当時の宮家が葛城氏と深い関係にあった、ということになります。

[「伊弉本和氣王の後と子息\(古事記\)」](#) 解説「黒比売」から

仁徳天皇のときに石之日売の嫉妬の対象になったのは吉備の黒日売であって、このページに登場している黒比売とは別人。オーソドックスな名前だったのではないかと。

[「罰としての黥。即位と皇妃とその子息子女\(日本書紀\)」](#) 解説「阿曇連の目」から

阿曇連は仁徳天皇の時代においては体制派だった。天皇の味方だった。しかし仲皇子の味方をした。これは阿曇連が反逆したというよりは、履中天皇が反体制派だったと考えたほうがシックリ来ます。履中天皇は弟の反正天皇の策略により天皇になった。阿曇連を罰しないといけないが、それ

は出来ない。なぜなら阿曇連は有力者だった。簡単に罰することは出来ない。おそらくほぼ罰せられなかったんじゃないかと。

「[罰としての黥。即位と皇妃とその子息子女\(日本書紀\)](#)」解説「葦田宿禰の娘の黒媛」から

仲皇子と履中天皇の戦争の根本はそもそも、黒媛という女の取り合いなんですよね。でも、この黒媛は羽田矢代宿禰の娘の黒媛。皇妃となったのは葦田宿禰の娘の黒媛。同一人物か、同名の別人か。黒媛って名前って仁徳天皇が淡路島へと会いに行ったのも黒媛だし、継体天皇の妃の一人も黒比売で、おそらく珍しい名前じゃないので同名の別人ってのは何ら不思議じゃないです。

「[罰としての黥。即位と皇妃とその子息子女\(日本書紀\)](#)」解説「飯豊皇女」から

日本神話・神社まとめ

「[罰としての黥。即位と皇妃とその子息子女\(日本書紀\)](#)」

「[伊弉本和氣王の后と子息\(古事記\)](#)」

20.20. 反正天皇

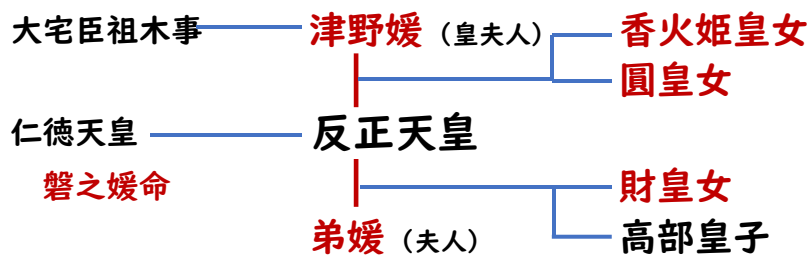


図 20.20A 反正天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

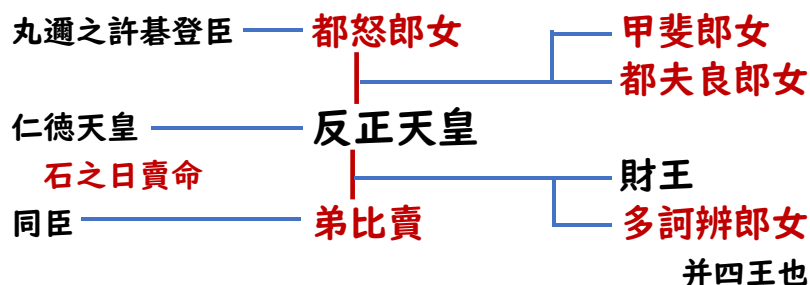


図 20.20B 反正天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「反正天皇」から

共に和珥木事の娘である和珥津野媛を皇夫人に、和珥弟媛を妃に立てる。同母兄弟の2天皇と異なり皇族の妻を娶ることはなく、子孫が即位することもなかった。

「[反正天皇\(日本書紀\)](#)」「解説」から

履中天皇は即位6年3月に死亡。次の反正天皇はその翌年の1月に即位して5年1月に死亡ということで、履中天皇と反正天皇は6年と5年とい

う短い期間しか天皇位についていませんでした。

履中天皇は仲皇子と戦争してどうにか即位。その仲皇子の部下をそそのかして仲皇子を殺したのが反正天皇。反正天皇はその仲皇子の部下を「不忠義」であることから殺害しています。反正天皇の手は血で汚れていた。だから記述が少ないのではないかと想います。天皇はスメラミコトと読みます。スメラとは清らかであるということ。天皇は清らかでないといけなかった。穢れてはいけない。反正天皇は戦争の功績から天皇位につくことができたが、その穢れは消えたわけではない。功績は別の天皇に吸収されたか、消されてしまった。とわたしは考えています。

日本神話・神社まとめ

[「反正天皇\(日本書紀\)」](#)

[「反正天皇の妃と子息子女\(古事記\)」](#)

20.21. 允恭天皇

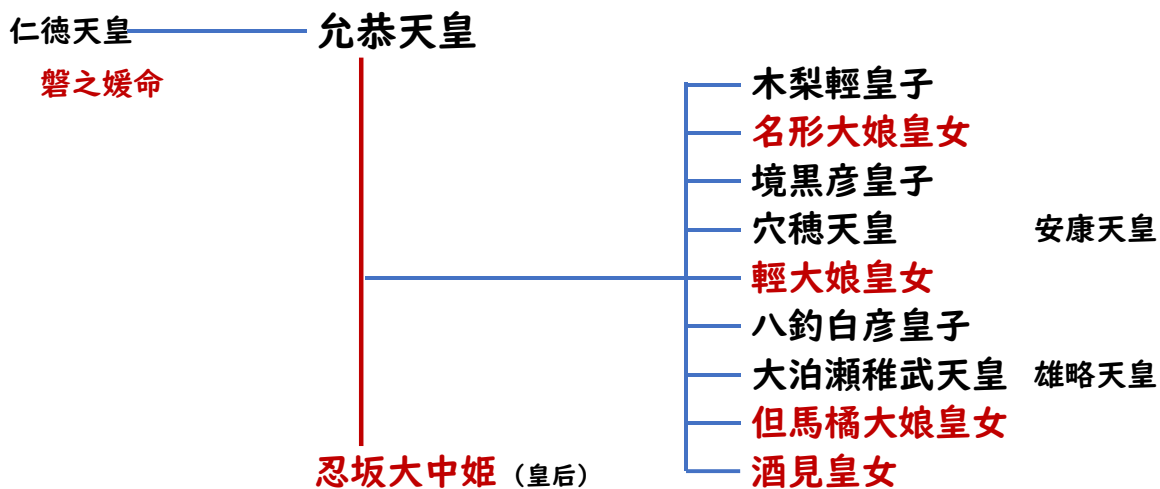


図 20.21A 允恭天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

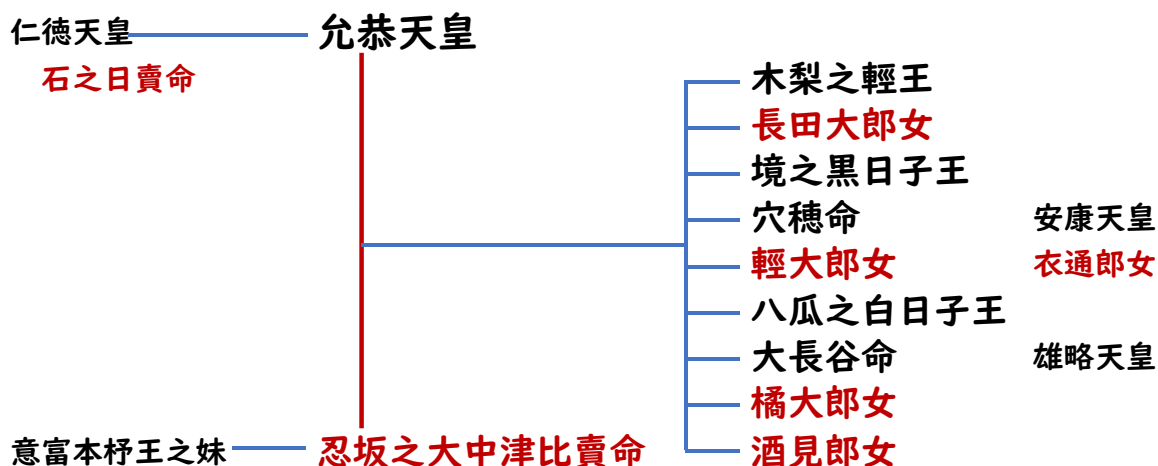


図 20.21B 允恭天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「忍坂大中姫」では

忍坂大中姫は、第 19 代允恭天皇の皇后。木梨輕皇子(允恭天皇の皇太子)・第 20 代安康天皇・第 21 代雄略天皇の実母。第 15 代応神天皇は祖父

にあたる。父は稚野毛二派皇子(応神天皇の皇子)。母は弟日売真若比売命(日本武尊の曾孫)。意富富杼王(第26代継体天皇の曾祖父)の同母妹。允恭天皇は夫であると同時に父方の従兄弟にもあたる。

日本書紀允恭紀に、允恭天皇2年2月14日に立后され、名代部として刑部が設定されたとある。このとき設定された名代部の一つが火葦北国(熊本県八代・葦北地方)であるとする説がある。当地から阿蘇ピンク石という石材が産出しており、河内平野の古墳の石棺にこの石材が用いられていることから、何らかの関係があるとする見方もある。

忍坂大中姫は、名にこそ踐坂(忍坂)と大和の地名を負っているが、日本書紀の允恭二年紀によれば、はじめ母と共に家に在ったというから、息長地方にいたと考えられる。このことは、允恭紀七年条によれば、妹の弟姫が随母以在於近江坂田とあるので、一層明らかである(息長は後の坂田郡内にあった)。

忍坂大中姫ら姉妹が允恭天皇の後妃となったことは、近江の地方豪族と天皇との婚姻の実例であり、景行天皇と美濃の地方豪族との結婚と比較して、はるかに信憑性の高い伝えである。そして、5世紀における天皇家の通婚圏が近江をも含めるものであったことがわかる。

允恭天皇42年12月14日、安康天皇の即位と同日に皇太后となった。

[「允恭天皇の皇后・妃と子息子女\(古事記\)」](#) 解説「兄弟継承」から

履中天皇の後はその弟の反正天皇、そしてこの允恭天皇と、三人は仁徳天皇の子供で嫉妬深いおなじみの石之日売命(磐之媛命)の同腹兄弟です。石之日売命は葛城襲津彦の娘ですから、仁徳天皇から允恭天皇までは葛城氏が強い影響力を持っていたと考えられます。

日本神話・神社まとめ

[「允恭天皇の皇后・妃と子息子女\(古事記\)」](#)

20.22. 安康天皇

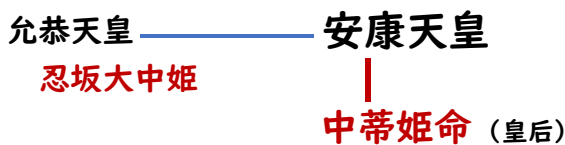


図 20.22A 安康天皇の後妃とその皇子皇女 (日本書紀)



図 20.22B 安康天皇の後妃とその皇子皇女 (古事記)

Wikipedia「中磯皇女」では

中磯皇女は、大草香皇子の妃、のち、安康天皇の皇后。中蒂姫命、長田大娘皇女。古事記には長田大郎女とある。父は履中天皇、母は皇后草香幡梭皇女(応神天皇皇女)。はじめ仁徳天皇皇子である大草香皇子の妃となり眉輪王をもうけた。大草香皇子が根使主の讒言がもとで安康天皇により殺されたのち、安康天皇の妃とされ、安康天皇 2 年 1 月 17 日(455 年)皇后となった。日本書紀によれば、安康天皇の寵愛は深かったという。安康天皇 3 年 8 月 9 日(456 年)、子の眉輪王は実父大草香皇子が母の夫となった安康天皇に殺されたと知り、中磯皇女の膝枕で寝ていた安康天皇を刺殺した。古事記では、安康天皇の同母姉の長田大郎女(名形大娘皇女)と同名で

ある。

意富富杼王の妻の中斯知命は他に傍証がなく、正体のつかめない人物であるが、写本を見ると知と姫を誤った可能性があり、これを中斯姫命としナカシヒメノミコトと訓むと、中磯皇女が想起される。中斯姫命がこの中蒂姫命のことであると考えれば、この女性にだけは誰の女であるという説明が欠けているのは、編纂の不手際といったことが原因ではなく、むしろはじめからなかったものと考えてよく、つまり上宮記の筆録者は、履中天皇の皇女で、大草香皇子の妃となり、さらには安康天皇の皇后となった史上著名なこの女性に、殊更説明を加える必要を認めなかった、とする説が存在する。

「[中蒂姫命と眉輪王\(日本書紀\)](#)」解説「大草香皇子の妻を皇后に・政治的視点から」から

政敵であり、死に追いこんだ大草香皇子の妻を皇后にしました。皇后です。単なる妃ならば問題ありません。皇后は別格です。そして安康天皇は幼い眉輪王によって暗殺されてしまいます。

これも物語では眉輪王が殺したことになっていますが、実際は違うハズです。非葛城による暗殺と考えるべきです。そして、この安康天皇の暗殺から、非葛城による逆襲が始まります。

「[中蒂姫命と眉輪王\(日本書紀\)](#)」解説「皇后について」から

実は天皇の皇后は基本的には皇女しか成れません。親が天皇かその血筋でないと皇后にはなれないのですね。例外もありますが(仁徳天皇の皇后の磐之媛)、基本的にはそうです。つまり安康天皇はもしかすると、天皇の資格を持っていなかったのかもしれないのです。皇女を妻にしている大草

. 皇女を殺して、その妻を娶るというのは天皇位を奪ったという意味なのかもしれません。そう考えると大泊瀬皇子が草香幡梭姫皇女にこだわる意味も分かりやすくなります。この政変の中で大泊瀬皇子は皇女を得ました。こうして大泊瀬皇子は次の天皇、雄略天皇となります。

日本神話・神社まとめ

「[中蒂姫命と眉輪王\(日本書紀\)](#)」

20.23. 雄略天皇

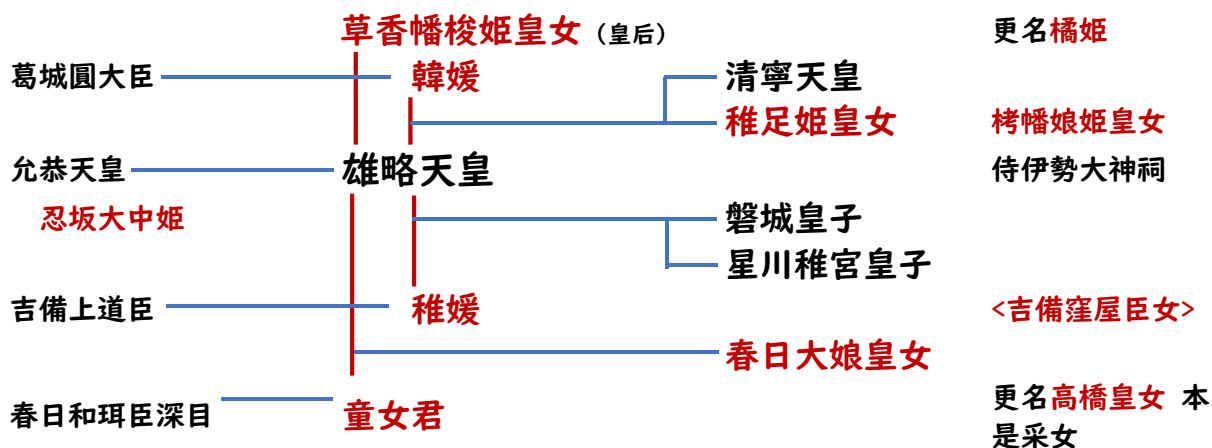


図 20.23A 雄略天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

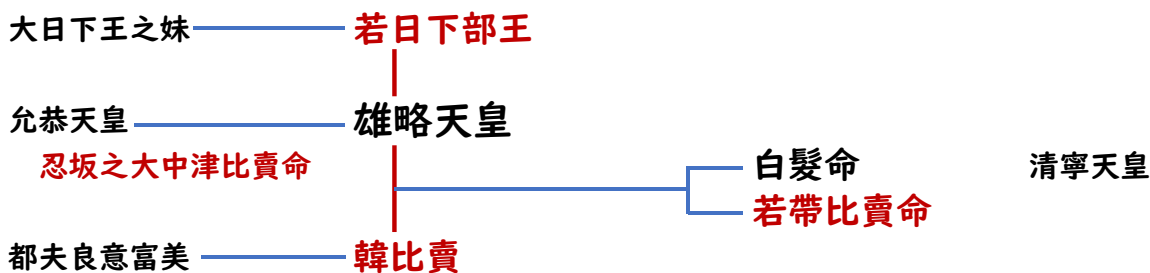


図 20.23B 雄略天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

大日下王と若日下部王は、仁徳天皇と髪長比賣の子供

雄略天皇は允恭天皇の子

Wikipedia「草香幡梭姫皇女」では

草香幡梭 姫皇女は、第 21 代雄略天皇の皇后。古事記には若日下（部）

王或は波多毘能若郎女とある。父は仁徳天皇、母は日向髪長媛(向諸県君牛諸井の女)。大草香皇子の同母妹。子女は無し。

安康天皇元年2月以降、大泊瀬皇子(の雄略天皇)妃となった。雄略天皇元年3月3日、雄略天皇の皇后に立后された。古代の部民である日下部氏は、この皇后の生活の資用に充てられた料地等の管理に従事した人々とする説があり、各地に配置された屯田兵のような軍事集団でもあったとされる。

古来、第17代履中天皇の皇后である草香幡梭皇女と同一人物であるとする説もある。

Wikipedia「葛城韓媛」では

葛城 韓媛は、古墳時代の豪族の葛城氏の娘。記紀に記されている雄略天皇の妃の一人で、白髪武広国押稚日本根子天皇(清寧天皇)と稚足姫皇女の生母。父は葛城円。古事記では韓比売あるいは訶良比売。

日本書紀巻第十四に伝えられる話によると、推定456年、雄略天皇の兄の安康天皇は父の大草香皇子の復仇のために遺児の眉輪王に殺害され、王は天皇の同母兄である坂合黒彦皇子とともに葛城円大臣の家に逃げ込んだ。天皇は引き渡しを求めたが、円は人臣である自分を頼って逃げてきた皇子たちを差し出すのは忍びないとして、これに応じなかった。天皇は円の家を取り囲み、円は最後まで皇子たちを庇おうとした。その代償として、娘の韓媛と、葛城の宅七区を献上し、贖罪をしようとしたが、天皇は許さ

ず、円の家に火をつけて、皇子ともども焼き殺してしまった。舎人たちが骨を拾おうとしたが、判別がつかず、新漢にある南の丘に合葬した。現在の奈良県吉野郡大淀町今木か、あるいは高市郡(旧名は今木郡)とされている。

古事記では、既に妻問いしていることになっているが、改めて側に仕えさせるために、さらに五処の屯倉を献上している。また、命乞いはせず、最後まで戦った上で、王を殺し、自裁している。しかし、大筋はほぼ同じである。清寧天皇や稚足姫皇女の年齢を加味すると、かなり前より関係があったことになる。

なお、葛城氏は、この後で雄略天皇に殺害される市辺押磐皇子と姻戚関係にあり(母が葛城襲津彦の子の葦田宿禰の女の黒媛で、妻が葦田宿禰の子の葛城蟻臣の女の黄媛)、そのため眉輪王は円を頼り、雄略天皇も市辺押磐皇子の後ろ盾を奪うために葛城氏を滅亡させた、と見ることもできる。

以上のように、この結婚には当初から大王家と葛城氏との抗争劇が背景にある。そんな中で、のちに天皇の皇太子になる白髪皇子と、悲劇的な最後を遂げる稚足姫皇女が誕生している。

雄略天皇元年3月、吉備稚媛らとともに3人の妃のうちの1人と認められる。書紀巻第十五によると、清寧天皇即位後、皇太夫人とされる。

葛城氏は没落し、以後、葛城氏出身の後妃は存在していない。

「解説：草香幡梭姫皇女」から

履中天皇の皇后にも全く同じ名前があります。ここでは仁徳天皇と日向髪長媛の間に生まれていて、大草香皇子の妹にあたります。ちなみに履中天皇の皇后と、雄略天皇の皇后は「同一人物」という説は昔からあります。

「解説：葛城円大臣の娘の韓媛・吉備上道臣の娘の稚姫」から

円大臣は雄略天皇によって殺されています。ざっくり言うと雄略天皇の兄の安康天皇を殺した、義理の子である眉輪王が逃げ込んだ先が円大臣で、韓媛はその娘です。雄略天皇はその韓媛を妃にしたわけです。もうね、ドロドロですよ。ちなみに安康天皇は政敵である大草香皇子を殺して、その妻である中蒂姫命を皇后にしたのですね。これもまたドロドロ。しかも大草加皇子と中蒂姫命の子供である眉輪王に殺されるのです。

これは雄略天皇7年になれそめが書いてあります。そこでは吉備上道臣田狭の妻だった稚姫を褒めると、それを聞いた雄略天皇が田狭を朝鮮半島の任那に左遷して、奪い取ったとあります。別伝では葛城氏の娘とあります。

日本神話・神社まとめ

[「雄略天皇（八）皇后と妃と子息子女\(日本書紀\)」](#)

[「大長谷若建命の政治と后と子息子女について\(古事記\)」](#)

20.24. 清寧天皇

日本書紀では后妃の記事は無い。

古事記では、無皇后 亦無御子 と書かれている。

20.25. 顕宗天皇

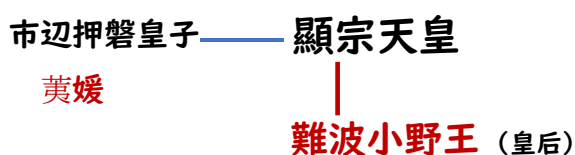


図 20.24A 顕宗天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

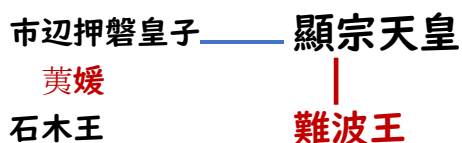


図 20.24B 顕宗天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

次の系譜も書かれている。

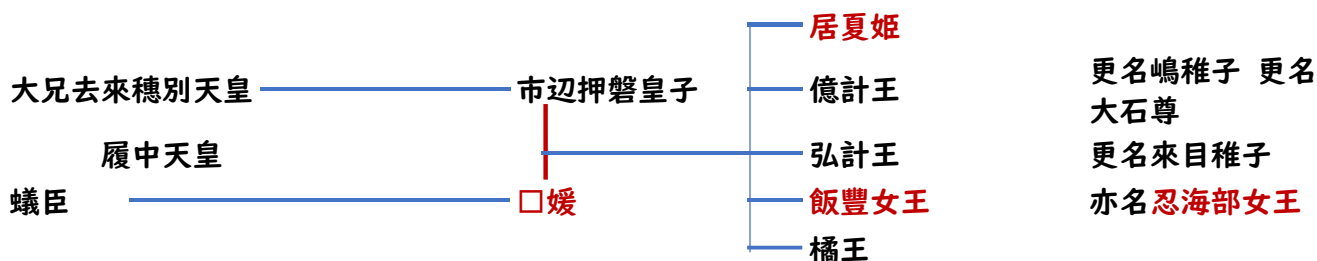


図 20.24C 市辺押磐皇子の妃とその皇子皇女（日本書紀）

Wikipedia「難波小野王」では

難波小野王は、顕宗天皇の皇后。難波小野女王とも。古事記には難波王とある。父は紀に丘稚子王(磐城王の子、磐城王は雄略天皇の皇子・磐城皇子か)、記に石木王(磐城皇子と同一人物と考えられる)とある。母は未詳。

顕宗天皇元年1月、顕宗天皇の即位と同月に皇后に立った。子女は無し。顕宗天皇が崩御し、次いで仁賢天皇が即位すると、皇太子であった頃の仁賢天皇に行った無礼な振舞いにより誅殺されることを恐れ、仁賢天皇2年9月に自殺した。

日本神話・神社まとめ

[「顕宗天皇の妃と子について\(古事記\)」](#)

20.26. 仁賢天皇

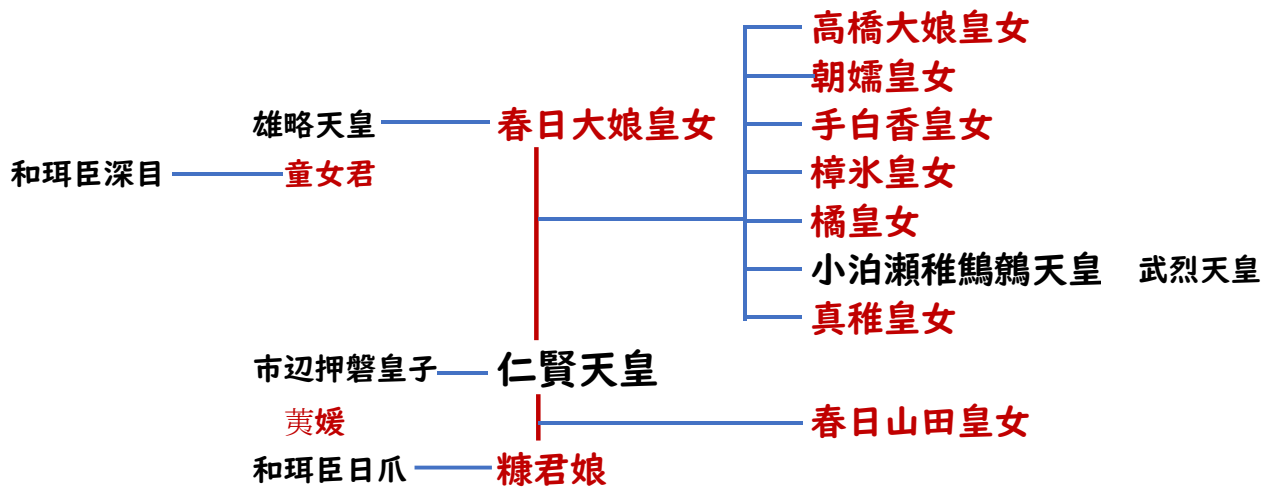


図 20.25A 仁賢天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

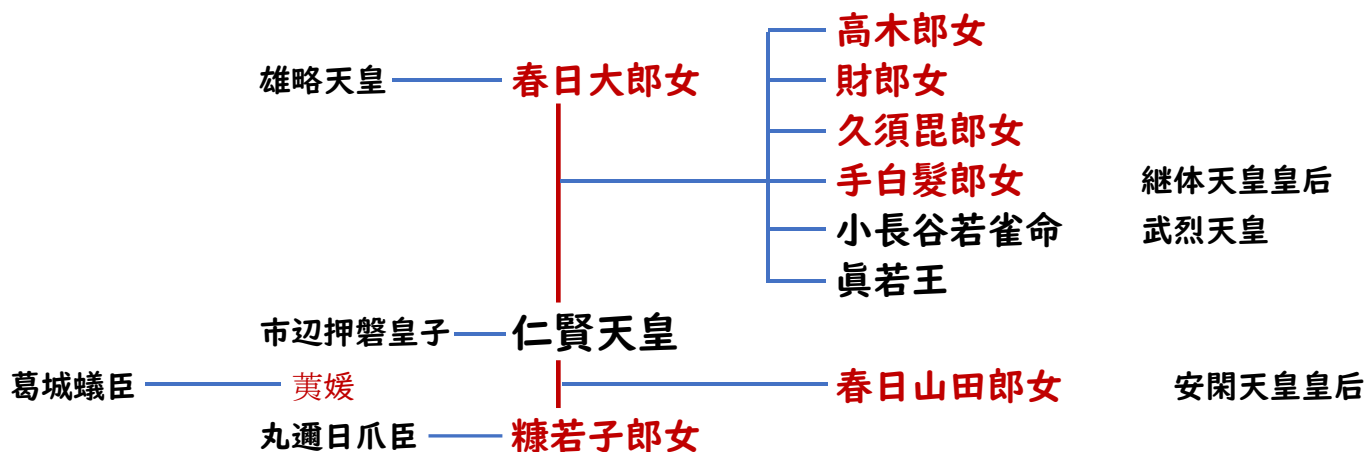


図 20.25B 仁賢天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

Wikipedia「春日大娘皇女」では

春日大娘 皇女は、記紀に伝えられている皇族。古事記に春日大郎女、日本書紀に春日大娘皇女。雄略天皇皇女、仁賢天皇皇后。母の名は日本書

紀にのみ和珥氏系統の春日和珥臣深目の娘・童女君とある。

日本書紀では、仁賢天皇元年2月2日に立后し仁賢天皇皇后となった。高橋大娘皇女・朝孀皇女・手白香皇女(後に継体天皇皇后、欽明天皇母)・樟氷皇女・橘皇女(後に宣化天皇皇后・石姫皇女母)・小泊瀬稚鷦鷯尊(武烈天皇)・真稚皇女を生んだとされる。古事記では高木郎女、財郎女、久須毘郎女、手白髪郎女、小長谷若雀命、真若王とある。

日本書紀によると、雄略天皇は采女の童女君がたった一夜で身ごもったために、生まれた春日大娘皇女が自分の娘であるかどうかを疑い、養育されなかった。あるとき物部目大連が庭を歩くある少女の姿を見て、天皇の姿によく似ていると述べた。天皇はそれで、彼女の母が一夜で身ごもったのは異常であるため、自分の娘であるか疑っていると答えた。物部目大連は天皇に一夜のうちに何度童女君を召したかを尋ねた。天皇は7度召したと答えた。物部目大連は天皇を諫めて、“身ごもりやすい人は禪が体に触れただけで身ごもります”と述べた。そこで天皇は少女を認知し皇女とし、母の童女君を妃とした。一方古事記にはこの出自の記述が見られず、雄略天皇の段にも母・娘ともに名を欠いており、仁賢天皇の段にやっと皇后として名が挙げられるにとどまる。なお、娘で宣化天皇皇后となった橘仲皇女も古事記には宣化天皇は橘中比売命を娶ったとだけ書かれている。したがって日本書紀の記述によってのみ、後に継体天皇の皇后となった手白香皇女の皇后の系統が雄略天皇からの直系であるとの証左を与えることに

なる。皇后の出自が書かれていない例は春日大娘皇女と橘仲皇女以外には見られない。

書紀の記述により、春日和珥童女君に始まる和珥氏・春日氏の皇后の系統が第30代の敏達天皇まで続くことになる。

[「仁賢天皇の皇后と妃と子息子女\(日本書紀\)」](#)「解説」から

仁賢天皇は父の仇である雄略天皇の娘を皇后として、次の天皇となる武烈天皇をもうけたわけです。物語の中では弟の顕宗天皇は雄略天皇を激しく憎み、墓を暴こうとし、それを兄の仁賢天皇が止めたのだから、仁賢天皇は冷静な人物であり、雄略天皇への憎しみは薄いのかもしれません。しかし、娘を皇后にしたというのは、どうもね。

わたしとしては、天皇というものが皇女を嫁にもらうことが条件だったんじゃないか？と考えています。ひっくり返すと、執政者としての権力は天皇ですが、権力の根拠というのが皇女にあった。皇女の女としての靈威と、皇族の血の靈威があって、権力の根拠とした。だから皇女と結婚しないといけない。なんというか、皇女は魔法少女の魔法のステッキみたいなもので、魔法少女に変身するには魔法のステッキが必要ですが、変身後に主体的に行動するのはあくまで主人公なわけです。だから主人公＝魔法少女なんですよ。でも魔法のステッキが無いなら、そもそも魔法少女であり

え無い。天皇と皇后(皇女)って、そういう関係性だったんじゃないかなあ、と。

「[仁賢天皇の皇后と妃と息子女\(古事記\)](#)」解説「和合があったのではないか？」
では

前のページ「大長谷天皇の陵への報復と結末」で雄略天皇への恨みと顕宗天皇の名誉の両方を守った仁賢天皇。仁賢天皇の妻は雄略天皇の娘。そしてその二人の間に生まれた次の天皇の武烈天皇の名前が小長谷若雀命です。長谷は大長谷若建こと雄略天皇から得たものでしょう。若雀は大雀命こと仁徳天皇から得たものでしょう。これまで雄略天皇を代表とする非葛城系と、顕宗天皇・仁賢天皇の葛城系はまさに血で血を洗う抗争を繰り広げていました。それが、長谷という名前と、彼らの偉大な先祖である仁徳天皇の名雀を持った子が生まれたのです。これは両者の和合と取れます。

日本神話・神社まとめ

「[仁賢天皇の皇后と妃と子息子女\(日本書紀\)](#)」

「[仁賢天皇の皇后と妃と息子女\(古事記\)](#)」

20.27. 武烈天皇

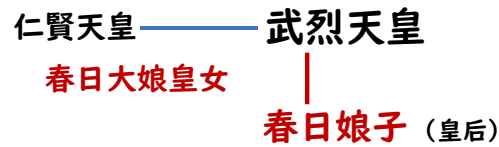


図 20.26A 武烈天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

古事記は 无太子

Wikipedia「春日娘子」では

春日娘子は、武烈天皇の皇后。但し、古事記には記載が無い。父母共に未詳で、子女無し。出自が全く不明で、春日という名前から想像して和珥氏縁の女性かと思われる程度である。尚、父が未詳の皇后は、史上春日娘子ただ一人である。

武烈天皇元年3月2日に、武烈天皇の皇后に立后された。

「[武烈天皇の治世と後継\(古事記\)](#)」解説「武烈天皇の陵」から

顕宗天皇が葬られた土地も片岡の石坏の岡です。武烈天皇は仁賢天皇の子で、武烈天皇から見ると顕宗天皇は叔父にあたります。同じ場所に埋めたのは何か理由があったのでしょうか。

[「武烈天皇の治世と後継\(古事記\)」](#) 解説「継体天皇へ」から

武烈天皇の時代について皇太子だけで無く、親戚にも後継者が途切れましました。いや、本当はいたのかもかもしれませんがね。もしかしたら、もう揉め事を避けて「リセット」するために継体天皇にバトンタッチしたのかもかもしれません。

継体天皇はよく「作られた天皇」みたいに言われます。無理やり血縁があるみたいに設定して地方から連れてきた天皇みたいな。まー、古事記とか日本書紀ってのは曖昧な記述が多く、神話めいたところもあり、疑えばどこまでも疑えるので、そこいらへんは深く考えないほうが楽しめるかと思えますね。

[「法令に明るく、残虐な人物\(日本書紀\)」](#) 解説「儒家と法家」から

徳治主義から見ると、法治主義ってのは「冷たい」「残虐」なんです。だって親の罪を役所に密告するのが「当たり前」の社会ってのは「冷たい」でしょう？ 武烈天皇は極刑を全部見たと書いてありますよね。法律で、コレコレの罪を犯したら極刑となっていたら、もう極刑にしないといけません。それを最後まで見とるというのも、責任の取り方であって、それを残虐と取るべきかは何とも言えないのですが、少なくとも儒教から見ると残虐なんです。

日本神話・神社まとめ

[「武烈天皇の治世と後継\(古事記\)」](#)

[「法令に明るく、残虐な人物\(日本書紀\)」](#)

20.28. 繼体天皇

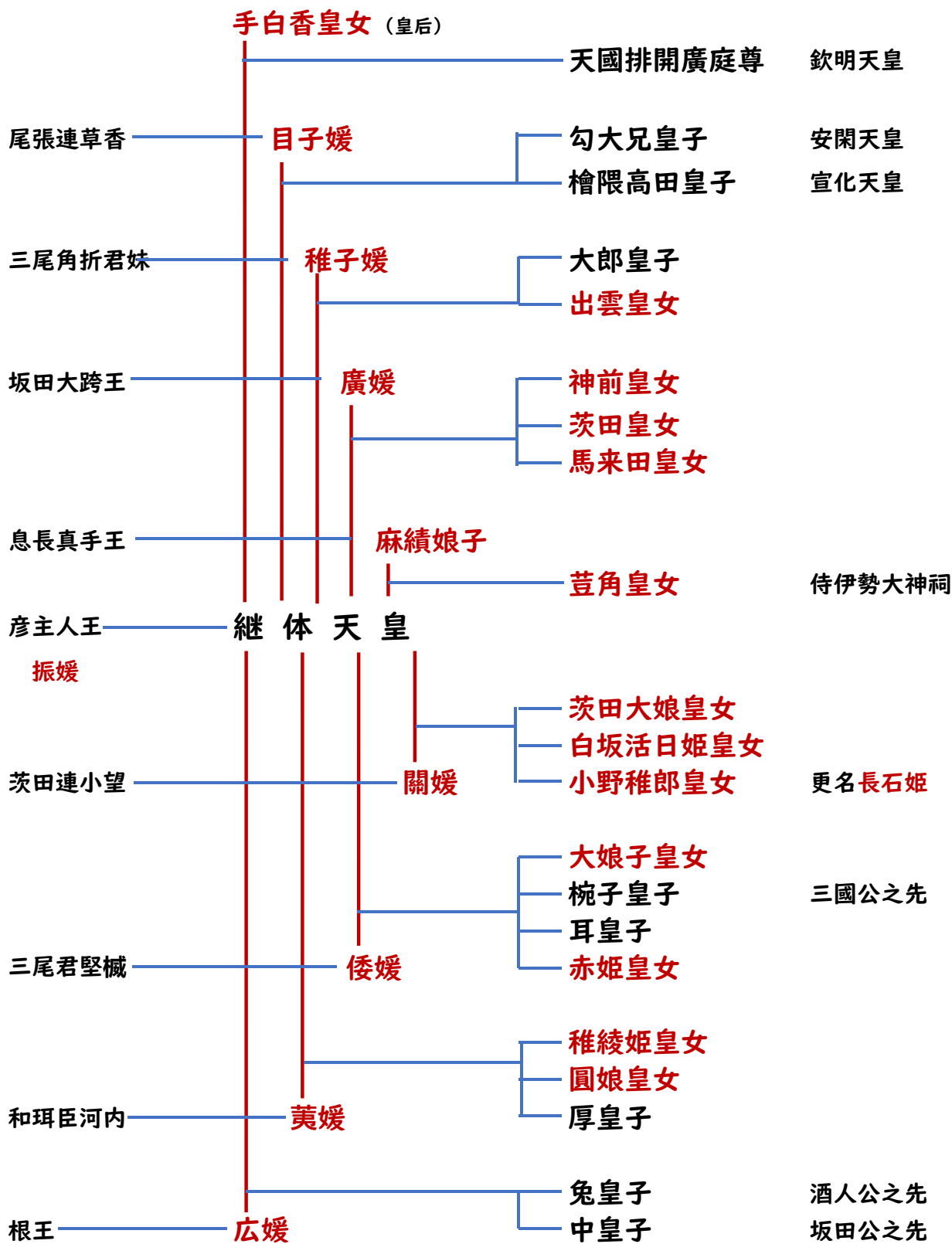


図 20.27A 繼体天皇の后妃とその皇子皇女 (日本書紀)

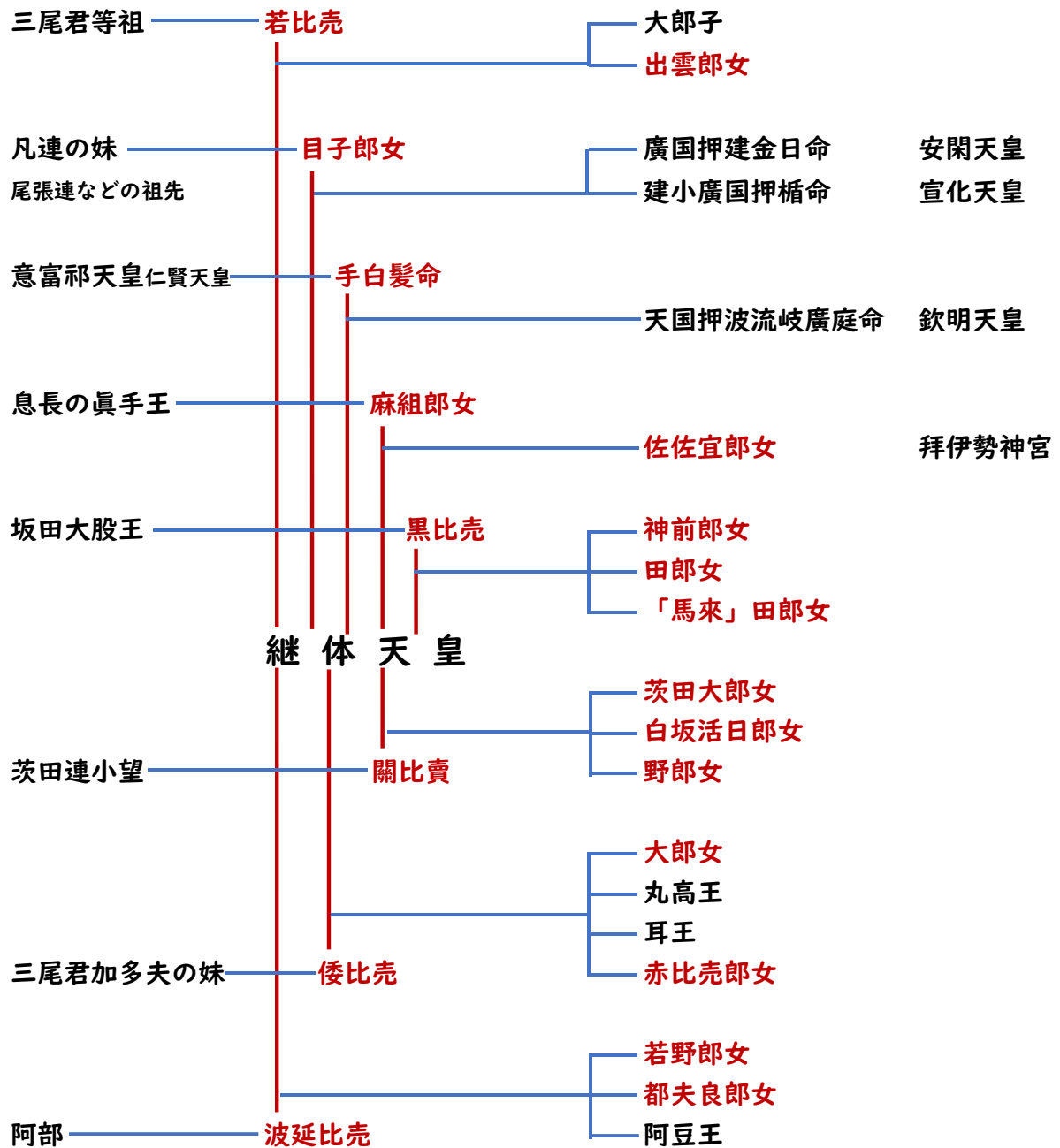


図 20.27B 繼體天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）



図 20.27C 繼體天皇の父母（日本書紀）

⇐、

后妃の数は日本書紀 9 人、古事記 8 人で、子女は日本書紀 21 人、古事記 19 人である。后妃の対応は(左が日本書紀右が古事記)、日本書紀の広媛以外は子女とも含めて次のように対応している、

手白香皇女⇔手白髪命、目子媛⇔目子郎女、稚子媛⇔若比売、
廣媛⇔黒比売、麻績娘子⇔麻組郎女、關媛⇔關比賣、倭媛⇔倭比売、
萐媛⇔波延比売

子女の尊称は、日本書紀は皇子皇女であるが、古事記では郎子郎女と皇子皇女が混在している。ただし、皇子皇女が使われているのは、皇后の皇子皇女のみである。郎子郎女の中に、割り込んだ感じである。

また、大娘子皇女のような例もある。大皇女ではそぐわない。姉媛命とはしにくく、苦肉のさくではないか。これから、古事記の郎子郎女を日本書紀では皇子皇女に置き替えやものと想われる。

Wikipedia「手白香皇女」では

手白香皇女は、日本の第 26 代継体天皇の皇后で、同天皇とは四従兄弟にあたる。仁賢天皇の皇女で、母は春日大娘皇女。同母弟に武烈天皇がいる。古事記の表記は手白髪郎女。子に欽明天皇。

仁賢天皇の皇女として誕生。母は雄略天皇の皇女である春日大娘皇女。

彼女が生まれる以前、父方の祖父である市辺押磐皇子が母方の祖父である雄略天皇によって殺害されたため、父の億計(のちの仁賢天皇)と叔父の

弘計(のちの顕宗天皇)は逃亡して身を隠していた。その後、雄略天皇の皇子の清寧天皇は子をなさなかったため、弘計(顕宗)と億計(仁賢)は大王に迎えられ、それぞれ即位(弟の顕宗の方が先に即位)した。

その後、傍系であった父の仁賢は、雄略天皇皇女の春日大娘皇女を皇后として迎え入れたため、たがいの祖父の代から2つに分かれていた皇統は統一された。この間に生まれたのが武烈天皇や手白香皇女らである。

以後、2つの皇統の血筋を合わせた唯一の男子である武烈天皇により皇統が維持されるはずであったが、武烈天皇は子をなさず若くして崩御した。雄略天皇の肅清によって、他の皇族男子はほとんど残っていなかったため、越前国から応神天皇の5世孫にあたる傍系のオホド(男大迹)王が大王として招かれた。これが継体天皇である。大王は、大連大伴金村の勧めにより、継体元年3月5日(507年4月2日)、手白香皇女を皇后に迎え、継体天皇の統治が始まることになる。

手白香皇女が継体天皇の皇后となった理由として、母である春日大娘皇女の場合と同様、傍系天皇の正統性を立てるための政略的な要因が大きかったと考えられている。つまり、傍系に属し、先代天皇とのあいだの血縁が非常に遠い継体天皇は、先帝の同母姉である手白香皇女を皇后にすることにより、一種の入り婿という形で正統性を獲得したということである。継体天皇は大和に入る以前、現地で複数の妃(尾張日子媛ほか)をもち沢山の子(安閑天皇・宣化天皇他)がいたにもかかわらず、手白香皇女とのあい

だの皇子である天国排開広庭尊(のちの欽明天皇)が正式な継承者とされていたことも、このような推論を裏づける。

このようにして継体天皇と手白香皇女との間に生まれた欽明天皇が、今日まで長く続く皇室の祖となった。欽明天皇は即位に当たって先の皇后を皇太后としたが、この皇太后は自身の母である手白香皇女か、安閑天皇の皇后である春日山田皇女か、宣化天皇の皇后である橘仲皇女か判然としない。

Wikipedia「尾張草香」では

尾張 草香は、古墳時代の豪族・尾張連の一人。姓は連。継体天皇の最初の妃であったとされる日子媛の父親で、安閑・宣化両天皇の外祖父にあたる。断夫山古墳は、彼の墓であるとする説と日子媛の墓とする説がある。後裔は不明である。

「[継体天皇（十）妃と子息子女\(日本書紀\)](#)」解説「なぜこんなに妃がいるのか？」から

妃は即位する以前に娶った、ということなので、継体天皇は天皇に即位するまえに、これだけの妃を娶っていたということになります。ところでよく継体天皇は無理やり立てた天皇と言われることがあります。継体天皇がもしも都落ちした没落皇子というならば、これだけの妃を迎えるのは不可能でしょう。

継体天皇が急ごしらえの傀儡ならば、越後にいたときは質素に生活して
いないとおかしい。でも、この妃の数ではちょっと疑わしいですよ。そ
れに、天皇に即位する直前まで中央と切れていた、というのも何とも言え
ない。越後(母親の実家)に居たといっても、子供の頃は近江に居たので
すから、中央とは完全に縁が切れていたとは何とも言えない。

その上でのこの妃の数を考えると…そもそも越後って豊かだったんじ
ゃないでしょうか?? 例えば大和・出雲と東北の蝦夷を結んだ交易で勢
力を強くしていた、ってことは無いんでしょうか??

わたしは大和が栄えたのは、関東と東北に大きな文明国があったからじ
ゃないかと踏んでいます。そうでないと九州より大和が経済の中心になる
っておかしいだろうと。それで大和が発展して関東に勢力を伸ばしてい
くと、今度は関東が大和の文化に近づいて魅力がなくなった。そこで越後
の方が蝦夷との貿易が盛んになった。大和が継体天皇を選んだのは、越後
のパイプを期待してであって、継体天皇はそもそも勢力が強かったのでは
ないかと思うんですよね。

[「継体天皇の皇后・妃と息子女\(古事記\)」](#)「解説」から

登場する氏族は、三尾君・尾張連・息長・坂田大股王・三尾君(二回目)
と仁賢天皇です。彼らの娘が継体天皇の皇后・妃として嫁に行っているの
です。

それで三尾はどうやら継体天皇の父母と関わりのある土地のようで、普通はそれが近江の地域だと言われていますが、人によっては越前の土地ではないか？とも言われます。継体天皇は近江の出自ではあるのですが、即位する前は越前に居て統治していたとされます（即位する前に住んでいた地域を近江とする説もあり）。まあ、どちらにしてもどうも三尾は継体天皇のそもそもの関係者じゃないのか？ってことです。

それで尾張は現在の愛知県熱田付近。息長は近江国坂田郡の地名。坂田大股王も近江国坂田郡なのでしょう。こう考えると尾張以外は近江につながる土地で、継体天皇は近江の勢力だったんじゃないかなあ？と思います。

ところが次の安閑天皇・宣化天皇は尾張連の娘から生まれているんですよ。うーん。ここに歴史の皮肉があるのか、意図したものがあるのか？いずれ考えをまとめて追記しますね。

日本神話・神社まとめ

[「継体天皇（十）妃と子息子女\(日本書紀\)」](#)

[「継体天皇の皇后・妃と子息子女\(古事記\)」](#)

20.29. 表を2つ

系図だけを見ても、なにも浮かんでこないのので、日本書紀(左)と古事記(右)に書かれている后妃と子女の数の表を作ってみた。景行天皇の蘭の最後の80は、古事記に80人を超える子女がいたと書かれていて、参考に挙げておいた。

表 20.01 継体天皇までの天皇の後妃子女数

	天皇	在位	日本書紀		日本書紀				古事記		
			陵		立后	立太子	后妃	子女	后妃	子女	
1	神武	75	畝傍山東北陵	橿原市				2	3	2	5
2	綏靖	33	倭桃花鳥田丘上陵	橿原市	2	25	1	1	1	1	1
3	安寧	40	畝傍山南御陰井上陵	橿原市	3	11	1	3	1	3	3
4	懿徳	34	畝傍山南織沙谿上陵	橿原市	2	22	1	1	1	2	2
5	孝昭	83	掖上博多山上陵	御所市	29	68	1	2	1	2	2
6	孝安	102	玉手丘上陵	御所市	26	76	1	1	1	2	2
7	孝靈	76	片丘馬坂陵	王寺町	2	36	3	7	4	8	8
8	孝元	57	劔池嶋上陵	橿原市	7	22	3	7	3	5	5
9	開化	61	春日率川坂本陵	奈良市	6	28	3	3	4	5	5
10	崇神	69	山邊道上陵	天理市	1	48	3	11	3	12	12
11	垂仁	99	菅原伏見陵	奈良市	2, 15	37	4	10	7	16	16
12	景行	60	倭國之山邊道上陵	天理市	2, 52	51	7	24	7	21 (80)	21 (80)
13	成務	60	倭國狹城盾列陵	奈良市		48	1	1	1	1	1
14	仲哀	9	恵我長野陵	藤井寺市	2		3	4	2	4	4
15	応神	41	恵我藻伏岡陵	羽曳野市	2	40	8	19	10	27	27
16	仁徳	87	百舌鳥野陵	堺市	2	31	2	6	4	6	6
17	履中	6	百舌鳥耳原陵	堺市	1, 6	2	2	4	1	3	3
18	反正	5	耳原陵	堺市	1		2	4	2	4	4
19	允恭	41	河内長野原陵	藤井寺市	2	23	1	9	1	9	9
20	安康	3	菅原伏見陵	奈良市	2		1		1		
21	雄略	24	丹比高鷲原陵	羽曳野市	1	22	4	5	2	2	2
22	清寧	5	河内坂門原陵	羽曳野市		3					
23	顕宗	3	傍丘磐杯丘陵	香芝市	1		1		1		
24	仁賢	11	埴生坂本陵	藤井寺市	1	7	2	8	2	7	7
25	武烈	9	傍丘磐杯丘陵	藤井寺市	1		1				
26	継体	25	藍野陵	茨木市	1		9	21	8	19	19

これだけでは貧弱なので、前章の陵のデータなど、日本書紀から得られる幾つかのデータも加えることにした。これらを説明しておこう。在位は在位年数の略で、日本書紀に書かれている崩御年を写した。

立後の蘭は皇后になった年である。2つの記載があるのは、皇后の逝去によるものである。2人目も立後の年に記年記事として書かれている。立太子は皇太子を任命した年である。

ここで、表 20.01 で欠史 8 代の天皇を見てみよう。考案天皇までの 5 人の后妃はそれぞれ 1 人で、残りの 3 人はそれぞれ 3 人である。これに陵の所在地を考えれば、3つのグループに分けられる。1つは、初めの 3 人で陵は橿原市にある。2つめは、続く 2 人で、陵は御所市にある。3つめは、残りの 3 人で、陵は王寺町・橿原市・奈良市にある。后妃は複数で、子女の数とともに後の天皇と同程度である。

御所と橿原は近いとすれば、これが主で、奈良と王寺が離れているとも考えられる。とにかく、この分け方に意味があるかどうかは検討する価値があるのではないか。

大阪湾から大和への経路としては、正面と言える大和川を遡るものと、紀ノ川を遡り、五条・吉野辺りで北上するものと、淀川を遡り、木津から南下する 3 つが考えられ、王寺・御所橿原・奈良は、それぞれ、3 ルートの大和に入った所になっている。

系図作成中に目についたこととして、幾つかの子女の尊称が用いられていることである。ということで、次の表を作成した。なお、○は使われていることを示し、◎は他はないか天皇のみを示す。

表 20.02 継体天皇までの子女の尊称

	神武 紀記	綏靖 紀記	安寧 紀記	懿徳 紀記	孝昭 紀記	孝安 紀記	孝靈 紀記	孝元 紀記	開化 紀記
命(尊)比賣命 天皇	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎	◎ ◎
		◎	○	◎	○	◎	○	○	○
	崇神 紀記	垂仁 紀記	景行 紀記	成務 紀記	仲哀 紀記	応神 紀記	仁徳 紀記	履中 紀記	反正 紀記
命(尊)比賣命 天皇	◎ ◎	◎ ○	○ ○		○	○	○		
王	○		○		○	○	○		
皇子皇女		○ ○	○	◎	○	○	○		
郎子郎女					◎	◎	◎	◎ ◎	◎
							○	○	◎
	允恭 紀記	安康 紀記	雄略 紀記	清寧 紀記	顕宗 紀記	仁賢 紀記	武烈 紀記	継体 紀記	
命(尊)比賣命 天皇	○		○			○		○ ○	
王	○		○		○	○		○	
皇子皇女	◎		◎		◎		◎		
郎子郎女	○					○		○	

表 20.02 で目に付くことを挙げていこう。

- 日本書紀では、天皇に就いた皇子は‘和風諡号+天皇’で挙げられている。一方、古事記では后妃と子女を列挙した後に、‘治天下也’と書かれている。

- 日本書紀では垂仁天皇紀まで、古事記では崇神天皇紀までは、命・比賣命のみが使われている。
- 日本書紀では景行天皇紀、古事記では崇神天皇紀と景行天皇紀では命・比賣命と王が用いられている、
- 日本書紀の仲哀天皇紀以後は、次を除いて、皇子皇女が用いられている。

應神天皇紀の菟道稚郎子皇子、菟道稚郎子

仁徳天皇紀の譽田天皇崩 時太子菟道稚郎子 讓位于大鷦鷯尊

景行天皇紀の小碓尊

- 複数の尊称が用いられている場合、各后妃の子女は殆どが同じ尊称が使われている。

あとがき

20 章では、継体天皇紀までの各天皇紀に書かれている后妃と子女の記事から系図を作成してみた。これは、「日本神話・神社まとめ」というサイトに掲載されている系図を手本に、記紀に書かれている他の情報を付け加えたものである。ただし、一書の内容は殆ど取り込むことが出来なかった。一書の記事の幾つかと長い記事の興味あるものは訳を付した。また、2つの表を作成した。後に作った子女の尊称については何か得られる気がしているが、感想を挙げただけで終わらざるを得なかった。ポイントは、古事記で用いられている複数の尊称の検討と考えている。この考察には、豪族と地名に関する知識を整えることが必要であると想っている。

豪族については Wikipedia では思いつく豪族は殆どが項目となっている。ここでは、「記紀によれば」、「日本書紀では」、「古事記では」と書かれているところの殆どは記紀の対応する部分の翻訳のようである。豪族の始祖の記事と、事跡としての初出の記事あたりを拾い集めることから、疑問点を探そうと思っている。豪族に近い用語に氏族がある。豪族には土地支配をしていて、倭王朝の支配下にはいったものというイメージを抱くには豪族のほうを採りたい。

残った固有名詞としては地名と人名が挙げられる。人名のかなりは豪族の検討で現れると思われることと、全てを扱うのはその数も相当なもので、

現時点では考えていない。

地名も相当多いが、人名よりは手を付けやすいと想っている。

人名や地名の表記に、万葉仮名的なものとうでないものが見られる。日本書紀では<春日此云箇酒鵝>や<率川此云伊社箇波>、古事記では<琉字以上十字以音>、<此神名以音>、<此四字以音>、<許呂二字以音>、<訓生云字牟下效此>、<訓別云和氣下效此>などの読みに関する記述がある。律令国家形成時に、地名姓名を漢字2文字とすることが行われたということを知んだか読んだ記憶がある。春日此云箇酒鵝は箇酒鵝を春日にかえたが注釈が必要であったということだろうか。万葉仮名から2文字の漢字による表記への変更(統一・共通)が行われ、記紀成立時頃にほぼ終了したと思われる。

二十章 継体天皇までの后妃とその皇子皇女

序	2
20.01. 系図について	3
20.02. 神武天皇の後妃と皇子皇女	7
20.03. 綏靖天皇の後妃と皇子皇女	10
20.04. 安寧天皇の後妃と皇子皇女	12
20.05. 懿徳天皇の後妃と皇子皇女	15
20.06. 孝昭天皇の後妃と皇子皇女	17
20.07. 孝安天皇の後妃と皇子皇女	19
20.08. 孝靈天皇の後妃と皇子皇女	21
20.09. 孝元天皇の後妃と皇子皇女	24
20.10. 開化天皇の後妃と皇子皇女	28
20.11. 崇神天皇の後妃と皇子皇女	32
20.12. 垂仁天皇の後妃と皇子皇女	37
20.13. 日本武尊の後妃と皇子皇女	46
20.14. 景行天皇の後妃と皇子皇女	53
20.15. 成務天皇の後妃と皇子皇女	60
20.16. 仲哀天皇の後妃と皇子皇女	62
20.17. 応神天皇の後妃と皇子皇女	65
20.18. 仁徳天皇の後妃と皇子皇女	76

20.19.	履中天皇の後妃と皇子皇女	80
20.20.	反正天皇の後妃と皇子皇女	83
20.21.	允恭天皇の後妃と皇子皇女	85
20.22.	安康天皇の後妃と皇子皇女	88
20.23.	雄略天皇の後妃と皇子皇女	91
20.24.	清寧天皇の後妃と皇子皇女	95
20.25.	顕宗天皇の後妃と皇子皇女	95
20.26.	仁賢天皇の後妃と皇子皇女	97
20.27.	武烈天皇の後妃と皇子皇女	101
20.28.	継体天皇の後妃と皇子皇女	104
20.29.	表を2つ	111
	あとがき	115